

アレキサンドライト

[ alexandrite ]

昼の太陽光下では青緑、夜の人工照明下では赤へと色変化をおこす宝石。

その多くは淡紅色から暗緑色への変化程度に留まるが、彩度の強い稀少なアレキサンドライトは鮮やかな青、緑、紫、赤へと魔法のような変化を見せる。

その神秘性から「神様のいたずら」とも称され

世界で最も高価な宝石の一つとされている。

石言葉は「秘めた思い」

# 目次

第一話	時にはヴァージンのように	・	・	・
第二話	壊れかけのテレビジョン	・	・	・
第三話	レッドライト・ヨコハマ	・	・	・
第四話	瞳はアレキサンドライト	・	・	・
エピローグ・プロローグ		・	・	・
		74	51	30
			21	05

この本は R-18 です。18 歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。

第一話 時にはヴァージンのように

君、まだその首輪をしてきているのだね。

カウンターに頬杖をついて背中をだらしなく丸め、いかにも酔いつぶれている風に装った声音で絡んでみると、間に一つ席を空けて隣に座っていた男がうざったそうに片手でしっしと追い払う仕草をした。

「話しかけんな。つか、他の店行けよ」

「厭だよ。中也が出ていけば？ 折角善さそうな店を見つけたと思ったのに、蛞蝓がいるなんて最悪」

「それは此方の台詞だ自殺願望。包帯の付属品が一丁前に酒なんて飲んでんじやねえよ」

川の泥水でも嘔つとけ、と吐き捨てて、中也は煙草のパッケージの底でカウンターを数度叩き、昔から愛着している銘柄を一本唇に啞えた。

「ああ、いいなあ。私にも頂戴」

「やなこと」

「もーらいっ」

「あっ!? てめ、そりゃ俺…の…」

強請って素直に寄越さないことなど分かっていたので、中也が卓上のゴールドンバットを黒い手袋に覆われた手のひらで隠した隙に、身体を椅子一つ分乗り出してその唇から掠め取ってやった。

そのまま彼の隣に座り直し、片足だけ座面の上で胡座をかく時のように折り曲げて、使いさしのブックマッチも拝借する。表に『ALLEXANDRITE』とバーの店名が印字されていた。

柔らかい紙のマッチの頭葉を台紙の着火剤で擦ると、しゅわしゅわと燃えた。その小さな炎に顔を寄せ、煙を深く肺に吸い込む。微かに洋酒の後味がした。

ちらりと隣の中也を見ると、私へのクレームは尻切れになったまま続けられる気配なく、どうしたのだろう、おつかいで道に迷った子供のような顔をしていた。しかし一瞬のことで、私の吐いたバットの煙に紛れたそれは、煙が晴れるとまたいつものしかめ面に戻っていた。

使うかい？ と私が店のマッチを指先でくるくる回して見せると、要らねえ、と嘆息して新しいものを口に啞え、ジャケットから取り出したデュポンの黒いガスライターで火を点けた。

「相変わらず気障な趣味だねえ」

「手前は趣味が悪くなった」

「酷いなあ」

私が多くの人にとって悪趣味であるのは元々だよ、と言うと、それもそうか、と淡泊な声を返し、ふうと細い煙を吐いた。

そして、それきり中也は黙ってしまった。

全く、これだ。話しかけるのはいつも私の方からなのだよな。口には出さずにそんなことを思う。

私たちは友人関係ではないから、自分が最近どうしているかなんて、互いに報告し合うことはない。それに、中也は一度騒ぎ出すと喧しいが、元来は口数の少ない男なのだ。それは自分がマフィアにいた時代から変わらないう。彼の方から私に話しかけてくるときは、抗争を何とかしろとか作戦をどうするだとか、好きに暴れて構わないかとか、要は仕事の話だった。探偵社とマフィア、生きる場所が離れた今は、それを求められることもない。彼との会話の殆どは、私の売り言葉に彼の買い言葉、中身なんてないそれだけで何時までも話していられただけだった。

「……手前がいつまでも、あのときの約束を使わねえからだろうが」

「……えっ？」

不意を突かれて思わず聞き返した私に、何だよ呆けてんのか？ と正面に並ぶ酒瓶から視線を動かさぬまま彼が言う。空になっていた彼のグラスに気づいたソムリエが後ろからそつと彼の葡萄酒のボトルを取って代わりを注いだ。

「あ、お兄さん、日本酒はあるかなあ」

「ねえよワインバーなんだから」

「ごきますよ」

「あるのかよ……」

「いやあ思った通り、善い店だ。それじゃ、お兄さんのお薦めを適当に持ってきてよ。あ、お代は隣の彼につけといてくれ給え」

「オイ払わねえぞ俺は」

「実は私、今日フラれちゃったのだよね」

「……はっ？」

今度は中也の方が不意を突かれ聞き返してきた。ワイングラスに指を添えたまま、漸く隣に座る私の顔を見る。

「此処に来る前にその子と喫茶店でデトしていたのだが、どうやら私が他の女性とも逢っているのが不満ならしくて、私のことが好きだけど、自分を一番愛してくれる人と付き合うことにしたんだってさ」

「そりゃ、百パーセント手前が悪いって話じゃねえか」

睡蓮の花が彫られた江戸切子のグラスが置かれ日本酒が注がれた。きんと冷えていて、舌の上で心地良い甘さが広がっていく。

中也の手元から二本目の煙草をくすねたが、彼はもう諦めたのか何も言わずに見ていた。

「そうかなあ。私は今夜は彼女と過ごす心算でいたから一人で寝るのがつまらなくてこうしてお酒の力を借りようとしているし、彼女はそこまで好きでもない男と付き合い合い内心満たされぬ日々を送る。彼女と付き合う男は彼女を一番に愛しても一番に愛されることはない。誰も幸せにならないじゃないか。女性の決断はいつも抽象的で残酷だよ」

「一番残酷なのは手前だよ、馬ア鹿」

世の女性たちのためにもさっさと死んでくれ、と言って、私の胸にとんとと右手の人差し指を突き付けると、

その手を銃の形にして「ばあん」と撃った。

「はは、動かなくなった。死んだかな」

「ちよつとなに：気色悪いことしないでよ」

一瞬、本当に心臓を撃たれたようにどきりとした。

どうせ、酒に弱い彼がほんの数杯の葡萄酒で酔い始めてたちの悪い絡み方をしてきただけなのだが、いつも懐に忍ばせている愛用の短刀で斬られたことも、自慢の拳で肋を折られたこともある私には、じやれるように触れられた箇所がむず痒くてたまらなかった。

「嫌がらせだよ色男。首領から休戦を言い渡されている今はムカついたって理由だけじゃ殴れねえからな。まあせいぜい寂しい夜を過ごせや」

金が払えるんなら、うちがやってる店の女を派遣してやってもいいぜ。くつくつと笑いながらそう言って、中はグラスに残った葡萄酒を喉に流し込み、席を立った。

「え、ちよ、中也、帰っちゃうの？」

「あんだよ。出て行って欲しかったんだろ？俺は帰って寝る。明日早えんだ」

「駄目！ 帰らないで中也！ このお店思ったより高くて君がいなくて好きだけ飲めないのだよ！」

「マフィアにたかってんじゃねえよ、この甲斐性なし！  
立ち飲み屋にでも行ってろ！」

「冷たいなあ、恋に破れた相棒を少しは慰めてくれたって——あ、いいことを思いついた」

私が『いいこと』と口にしたら中也是露骨に嫌な顔をした。昔からこういう場面でそれが彼にとっていいことだった試しがないからだ。そして今回も、その予感はずたっている。

「あのときの約束、今使うことにしたよ。中也是今後、私が女性に振られたときには全身全霊で私を慰めること。いいよね？」

「……やつと使ったかと思えば」

やり甲斐がねえにも程があるな、と溜息を吐いて、中也是一度肩に掛けたコートを再び椅子の背に戻し、隣に座り直した。カウンターの向こうでマスターが目配せしてきたのにコーヒーを一杯注文する。やっぱり少し酔いが回っていたらしい。

「私の命令を一度だけ何でも犬のように遂行する約束だ。大嫌いな私を誠心誠意尽くして慰めるなんて、嫌がらせとしては上等だろう？」

「手前が女に振られる度にか？ 一度だけって条件はどこ行っただよ。手前はあれだ、ランプの精に『ずっと自分に従え』とか『魔法を使えるようにしろ』とか願うタイプだな。セコいやり方しやがって」

「私ほどのいい男がそう何度も振られると思うかい？ 実質この一回きりかもしれない。年代物のランプから出られるまたとないチャンスだよ、妖精さん」

「どうだかな。今の手前の取り柄なんてその無駄に整ったツラとよく回る口だけだろ。毎晩呼び出される羽目になることだって有り得るぜ」

「なんだか褒められている。昔から中也是酔うとやたらに人の顔を褒めてくる癖があったが、それは今も健在なようだ。」

「ノリ悪いなあ。じゃあやめておく？ 財布だけ置いて行ってくれてもいいよ」

「探偵社つてのはそんなに儲からねえのかよ、昔は俺の十倍は稼いでたくせに」

「別に給金が少ないわけではないよ。財布が川に流されたり：あとは、ほぼ毎晩飲んでいるからねえ。殆どお酒に消えているのかも」

「マジの人間失格じゃねえか……」

「お後がよろしいようで。で、返事は？」

中也は目の前に提供されたコーヒーカップの中の黒い湖面を黙って見つめていた。珍しく角砂糖を一粒落とし、小さなスプーンでくるくるとかき混ぜながら、命令なら聞くさ、そういう約束だからな、と答えた。

「ただし、一度きりじゃない内容に変えてきた代償に、俺から二つ条件を付けさせてもらおう」

「二つも？ 慾張るねえ」

まあ聞くだけ聞こうか、と言って、日本酒を手酌できるように瓶で持って来させた。何を言うつもりか知らないが、どうせこの会話自体が私にとっては今夜の暇潰しなのだ。それならば相棒の口数は多い方が良い。

「一つは、傷心のロミオを慰めてやる方法は俺が決める。リクエストは聞くだけ聞かすが、採用するかどうかは俺の気分次第だ」

「駄目だよ。それじゃさつきみたいに私を置いて帰ろうとしたって、一人にしてやるのが慰めになるとか言ええ通ってしまうじゃないか」

中也は構わずに続ける。

「方法はこの後に言うが、毎回同じだ。途中で変えたりしねえ。もう一つの条件は、俺をこの件で呼び出すとき、手前は手前を振った女のことを事細かに俺に話すこと」

「は……？」

ぼろ、と三本目の盗品の灰が指からこぼれた。一つ目は予想の範疇だったが、二つ目は予想外だった。

「容姿は勿論、服の好み、喋り方、出自に生業、歩く時の足の裁き方からベッドの中での振る舞いに至るまで、全部だ。そうしたら——」

「そうしたら……？」

「そうしたら、全部その通りにしてやるよ」

それが俺の慰め方だ。返事は？

中也は私の目をまっすぐに見つめながら、角砂糖入りのコーヒーに口を付け、甘えな、と舌を出した。

◇ ◇ ◇

どうしてこんなことになったのだったか。

先に入るか？ というお伺いを辞退したので、中也が先にシャワーを浴びている。

先に？ 先についてなんだ。私は今夜ここに泊まっているのだろうか。訳も分からず連れて来られたので、この先の展開がさっぱり読めていなかった。

バーを出てから、中也是少し歩こうぜと言って私の隣に並んだ。この間のQ奪還作戦のときには最低二メートルは離れるだのと言っていたくせに、真夜中の街灯の下を連れ立って歩いていると、今がいつで、自分たちの属している組織がどこなのか、ふと忘れてしまいそうになった。

他人の、まして私の色恋沙汰になんて全く興味がないはずなのに、中也是女性たちのランチタイムの話題のように手を叩きながら笑って私の話を聞いた。

それで？ 仕事は何をしていた女なんだ？ 箱入りのお嬢さんじゃねえか可哀想に、どこで出会ったんだ？ よくそんな歯の浮く台詞が言えたもんだな、喜ぶ女も女だ、おいおい初めてだったのかよ親御さんに慰謝料は払わなくていいのか？ 最中には手前をなんて呼ぶんだよ、なんだよいいじゃねえか減るもんじゃなし……

そんな風に、正直言って私自身も面白い話ではないと思う話を、オーバーなくらいに反応してそれでそれだと

引き出してくるものだから、本当に根掘り葉掘り聞き出されているなあと気付いてはいたのだが、そのまま私の元彼女（のうちの一人）の話だけでバーの閉店時間まで居座ってしまった。

国木田君も敦君もこの手の話題は不得手だし、下衆な会話が少し新鮮だったのかもしれない。まして相手が中也だ。いつも一言目には死ぬ、二言目には殺す、三言目には俺と戦えだった脳筋が相手に話を合わせて情報を引き出すなんて、流石に幹部様ともなると少しは成長したということだろうか。

太宰治を振った女の情報、なんて入手したところで使える場面は無いと思うし、いくら話しても私には痛くも痒くも無いので、それを話せという条件を付け、実際に聞き出しにかかる中也の真意は測りかねたが、私にとつて全く気を遣わなくて済む相手がこうして夜が明けるまで退屈凌ぎに付き合ってくれるというのなら、我ながら良い命令をしたものだ——そんなことを考えていた間に腕を引かれて連れ込まれていたのだった。ラブの付くホテルの一室に。

「まさかとは思うけど……」



まさかそういう意味で『慰めてやる』つもりなのだろうか。いや、いやいやいやそんな馬鹿な。いくら何でも大嫌いな私相手に中也がそこまで差し出す理由が無い。

そこまでしろと命令したわけでもないし、悪ふざけにしても度を過ぎている。そもそも中原中也という男は、酒の席での猥談に興じることこそあれど、どちらかと言えば人肌に触れたり触れられたりすることを嫌っていた男ではなかったか。

そうだ、何を焦っているんだ私は。なまじ自分が興味本位で男を抱いた経験があるからこんな可能性を考えてしまうのであって、中也が悪ノリやジョークの延長で男を誘ったりするはずがないじゃないか。

びぎやー！ と甲高い鳴き声がホテルの壁に掛けられている液晶テレビから聞こえてきた。中也がバスルームに消える前に勝手につけていったハリウッド映画だ。

開始数分でコールドスリープから目覚めた肉食恐竜が平和な街に解き放たれ、恐怖に逃げ惑う住民たちの悲鳴と恐竜の鳴き声ばかりが延々と続くどうしようもない内容である。冒頭では十数人いた登場人物が今見たら二人になっていた。全員喰われたのだろう。それにしても、

随分長いシャワーだ。

「すみません……お待たせしてしまいました」

「ああ、やつと出てきた。小さいから浴槽で溺れちゃったのかと思った……よ……？」

今、すみませんと言ったか？ 中也が私に？

「酷い。そんな意地悪を仰らないでください……太宰様」

「太宰様!? ちよつと何？ さては浴室でまた飲み直してたんじゃないだろうね……ちゆう、や」

そこにいたのは、確かに中也だった。

丈の短いバスローブを羽織り、あらわになった太腿を隠すようにきゅつと裾を掴んで、部屋のドアを開けた所で心細げに立っていた。

時間がかかっていた割には髪も乾かしておらず、垂れた前髪の前からはぼたぼたと雫が落ちていた。それは頬や首筋に貼り付いた髪からも肌の上を伝い、鎖骨の谷間、その下の見えないところを濡らしながら流れていく。

「貧相な身体だと仰りたいのでしょうか？ 分かっています……あなたのお相手の女性たちと比べたら、わたしの身体なんてお子様に見えるのでしょうか？」

「いや、お子様も何も、君は男だし……」

男の身体としては寧ろめっちゃめっちゃ筋肉が出来上がってる方だと思うけど、女性と比べたらそりやおっぱいがないのは当然で……と、そこまで考えて、はたと彼がパーと言っていた言葉を思い出した。

手前を振った女のことを事細かに俺に話すこと。

そうしたら、全部その通りにしてやるよ。

「そういうこと？ あおねえ中也、君にしては面白い悪戯だけど、それはどう考えても無理が——」

ベッドの端に腰掛けていた私の前に彼が立った。その肩越しに、B級映画のエンドロールが無音で流れている。結局あの残された二人はどうなったのだろうか？ 見逃した結末に気を取られた隙に、しゅるりと衣摺れの音が聞こえ、バスローブの腰紐が床に落とされた。

「お願い……今夜だけでも、わたしだけを見て……」

前面の視界いっぱい結び目を失くして開かれた彼の裸体が飛び込んできた。普段は黒に覆われて滅多に露出することのない真っ白な肌、そこに色づく胸の尖りと、自分のものとは違う赫色の下生え、その奥にひそむ陰茎の生々しい肉の色。

言葉を失った。嘘だろ。ここまでするか。

昔、任務で下手を打って負傷した彼の服を脱がせ応急処置を施したときですら、こんなところまで見たことはない。あのときは上を脱がせるのも、まさしく手負いの獣のように嫌がって暴れていた。それなのに、今は全てが自分の目前に曝け出されている。

細い腰に手を回し、ベッドに座ったままでその身体を引き寄せた。万に一つ、パーで会った時点で何らかの異能にかかっていたという可能性を考えたが、それはないようだ。できればそうであってほしかった。それならば、正気に返った中也が「ためえ太宰！」と殴りかかってきてそれでオチがつく。今後揶揄うネタとして写真の一枚や二枚撮らせてもらって、それで終わりだ。

けどまだ、中也が始めた舞台の幕は下りない。私の身体を跨いで膝立ちになった彼の瞳には、触れられた手の続きを期待する女の感情が灯っていた。実に役に入り込んだ演技じゃないか。

なぜか、ひどく不愉快な気持ちになっていた。

突然の中也の奇行に少なからず動揺している自分も、こんなやり方で私を驚かせようと考えた中也のらしくなさも、まったくもって気に入らない。

「ひよっとして、こないだ内股歩きのお嬢様口調させた仕返しのつもりなの？ よりにもよってこの分野で私をおちよくろうなんて、いい度胸してるよ」

目の前にはこの状況の発端となった黒革のチョーカーがそれだけ律儀に残されていた。金具に指を掛けて外そうとすると、私の両肩に置かれていた彼の手がびくりと震えた。何かを言おうとした唇が、開いて、また閉じてを繰り返す。

「どうしたの中也。緊張してる？ そっちから仕掛けてきたくせに」

無防備になった首筋にキスを落とすと、ひ、と息をのんで身体を固くし、ぶるぶると震えた。どうだ気持ち悪いだらう。負けの見えた勝負を挑んでくるからだ。

私の前で服を脱いで女の真似事なんてしたことを心底後悔させて、この先十年はそのネタでいじめてやろう。まだ自分がマフィアにいたなら『今週の負け惜しみ中也』袋綴じ付き増刊号が出ていたであろう特ダネである。

背中に手を回し、ベッドの上にその身体を横たえる。触れてみるとはつきりと分かる男の身体。引き締まった背筋も、二の腕も、柔らかいとこなんてありゃしない。

それなのに、いつも凶暴に振るわれる拳も脚もすつかり大人しくなっていたおやかにシーツの上に沈んでいる有様は、妙な色香を放っていた。

髪を撫でながら指先で唇をつつき、ねえ降参しなよ、と忠告したが、彼は何も言わずに目を閉じた。その表情からは、我慢している様子も読み取れない。鳥肌を堪えている私の方がやや押されている状況だった。

なんて強情な奴。こうなると私もノーダメージというわけにもいかないか。わざと聞こえるように溜息を吐いて、初めは触れるだけのキスをした。

唇はとても冷たかった。やっぱり緊張しているんじゃないか。そう思うのと同時に、跳ね返った自分の吐息の熱さに困惑する。

きゅっと結ばれていた唇の端を舌先でつついて、手紙の封を開けるように薄皮を舐め取りながら口を開かせる。真っ赤な舌がちろりと覗いて、おずおずと躊躇いながら私の舌を迎え入れた。

これは、まずいんじゃないか？  
頭の中で警鐘が鳴ったが、中也が退かないから止めることができない。互いの唾液が交じり合い、濡れた音を

立て始めてもなお、もうやめろ、いかげんにしろという言葉を貰えない。それどころか苦しげに私のシャツを掴みながら、ださい、さ…となおもお寒い演技を続けようとするので、酸素も与えてやらなかった。脳が痺れて、二人の視界に二人しか入らなくなっていく。

最悪なことに、勃ってしまった。世界一嫌いな人間と唇を合わせて反応してしまうなんて、私はひよつとして変態だったのだろうか。

中也の裸の太腿に膨らんだそれを擦り付けて自分の熱を教えてやると、彼は驚きに目を見開いて、んっ、んう、とくぐもった声を上げた。ああやっとか、これでやっ而降参してくれる気になっただろ、いま口を開けて喋らせてやれば、彼はもうやめろ俺が悪かったと言うだろう、そしたら本当に終わりだ、私がいま、このキスをやめてやったら、それで。

「んっ…はっ、も、やめ」

苦しげに背けようとした顔を両手で掴んで引き戻し、それ以上声を出せぬよう彼の唇にしゃぶり付いた。中也の口は、私の口より小さいんだなあなんて、意外な事実に気づいたりする。とがった犬歯をなぞり舌の裏側をね

ぶつてやると、声も出せぬまま悲鳴を上げて、びくんびくんと身体を大きく震わせた。

「……っふ、中也、もしかして、キスだけでイッチャったの？」

彼の腹をまさぐると、粘ついた精液でべっとり濡れている。当然私の着ている服もだ。まったくどうしてくれよう。汚れた服で歩くのは慣れてるが、これは中也のせいなのだから彼にクリーニング代を請求しよう。

「君には今まで色んな嫌がらせをしてきたけれど、イかせてやったのは初めてだねえ」

呼吸を荒くして上気した彼の頬を、彼の精液で汚れたままの手のひらで撫でた。惚けていた目が羞恥に滲んで、私の視線と重なる。

「あ、の…」

「…うん。ごめんなさいは？」

「…初めてだから、優しく、してくださいい…」

「…へえ、そう。まだそれ続けるんだ」

あのさ、意味分かって言ってるの？

この後に及んで負けを認めない中也を表の顔ではあざ笑いながら、その実、追いつめられているのは自分の方

だと感じていた。どうやらまだこの行為を続けても良いと分かって、内心、楽しいと、思ってしまった。

どこまでなら、からかってもいいの？

どこまでなら、あれは腐れ縁の延長戦上のことだったと、後で笑い話にしてくれる？

もっと君で遊びたい、でも君と私の関係が何か今までは違うものに変わってしまったら、それはとてもさみしいことのように思えた。

「ねえ、優しくって、どうしてほしいの？ もっとキスをしてほしい？ それとも……」

膝頭をまるく撫でて、その手をゆつくりと太腿に這わせる。さっきの放埒でじっとり湿った茂みを掻き分けながら、引き締まった尻の割れ目に指を潜らせた。

中也は男だ。女性のように濡れたりはしないし、最初からここを使って気持ち良くなることは難しいだろう。それなら、今夜はたっぷり時間をかけて解してやって、後ろで快感を拾える身体にしてやろうか。

うん、いい考えだ。どこを触ってんだやめろ馬鹿死ねとかたぶんそんな感じの怒号を聞きながら、性に疎い彼に未知の快楽を教えてやって、その様を散々言葉でから

かかってやって、それで終わり。この変な意地の張り合いの引き際としても妥当だろう。

さあそうと決まれば盛大にビビってもらおうかな、とむくむく湧いてくる悪戯心に任せて、立てた中指を躊躇なく中也の中に差し込んだ。

「……あれ……？」

中也は、怒りも痛がりもしなかった。

そこは、すでに柔らかくほぐれて、この指を待ちわびていた。入口に少し触れただけで、奥からとろりとした液体が溢れ出て、私の手首まで伝う。

「中也、準備……してたの……？」

やけに長かったシャワーは、うるさい映画をつけっ放しにして行ったのは、このためだったのか。中也は浴室で自分で後孔を広げて、ご丁寧に中にローションまで仕込んで出てきたのだ。そんなことをする理由は一つしかない。私とセックスするためだ。

人に触れられるのが嫌いで、性に疎いだって？

それは私の思い違いだったようだ。

四年振りに再会したとき、君は全然変わらないね、と私は言ったけれど、四年、たった四年会わなかった間に、

私の犬は殴る蹴る以外の、酒を飲む以外の、音楽を聴く以外の、つまらない遊びを覚えてしまったらしい。

そして、よりにもよって彼にとつて無二の相棒であるはずの私にまで簡単に足を開く駄犬と成り果てた。

成程ね、こつちが嫌がらせの本命か。だとすれば大功だよ。今、最高に気分が悪くなった。

自分の中に黒い泥水が広がって、心が冷えていくのを感じていた。それに反して、頭はぐつぐつと煮えている。

どこまでならいいのかなんて、氣遣っていた自分が滑稽だ。中也にとつてこの行為は、酒の席での思いつきで、相手なんか誰でも構わない、ついでにすっきりできれば最高だと、その程度の理由で出来てしまうことなのだ。私が、夜に眠れずにするのと同じように。

「君のことが本当に：大嫌いだって、思い出したよ：」  
ループタイをほどこいて、サイドボードに置く。アレキサンドライトのペンダントトップがきらりと光るのを何か言いたげな瞳が追っていた。シャツを脱ぎ捨てて体重をかけると、私の身体に手を伸ばし、包帯の繋ぎ目を指でかりかりと引っ掻いた。

「あ、うっ……」

中指も、薬指も、中也の身体の中に飲み込まれていく。彼の膝が跳ねて、私の腰にぶつかった。

「さあお嬢さん、もつと声を出しなよ。初めて私とした夜のようにさ」

下手な演技に付き合っただけでそう言っただけで、自ら私の指を自分の内側に擦り付けて、熱い吐息を漏らした。

「ここ？　ここが好きなんだ。えらいね、自分で気持ちいいところを教えてくれるんだ」

押しつけるでも縋りつくでもなく、ただ所在なげに私の肩に触れていた彼の手を取り、汗ばんだ手のひらに舌を這わせた。いつも手袋をしているからだろう、暴力の商売道具のはずなのに、つるりとして傷一つない。こっちは本当に御令嬢のようだと思ってしまった。

「教えてもらった場所を指の腹で押しつぶしながらぐりぐりと回してやると、うあっ……とハスキーな声で鳴いて、ゆらゆらと腰をくねらせる。」

これで終わり、これで終わりだと何度も、さっきから自分に言い聞かせていたのに、憎らしい相棒の乱れる姿を見下ろしていると、痛いくらいに硬くなって、欲望を放出したくて堪らない。

この柔らかくて温かい場所に突っ込んで動かしたら、どんなに気持ちがいいだろう。

動物のように息が上がり、口の中いっぱい唾液が溢れてくる。もう無理だ。犯してしまいたい、この男を。ゆっくりと指を引き抜くと、名残惜しそうに息を吐いて、中也是は両脚を広げた。その片脚を肩に担いで距離を詰め、熱と熱とを密着させる。ベルトを外して窮屈な下着から自身の性器を解放し、どろどろに溶けた蕾の中を押し込んだ。

「……ッぐ、うう……」

可愛くない声に、どうしようもなく興奮した。中也是は唇を噛み締めて仰け反り、私の腕に爪を立てる。

「……ね、もっと緩めて……きつい……」

「むり……！……です……」

「はは、お遊戯頑張るねえ……お尻にこんなもの入れられちゃってるのに。それとも、それだけ余裕があるってことなのかな」

私の方は、そんなに余裕がないみたい。

初めてじゃないくせに初めてのふりして、身体までの役に入りきった締め付けで私の肉棒に吸い付いてくる。

ぶくんと膨らんだ胸の尖りに爪を立てると、それはいやですやめたと頭を振った。

可愛いねえ、上手、上手。

弄られた経験のあるのは明らかで、機嫌はますます悪くなっていく。だというのに腰を進めれば進めるほどに気持ち良くて、自然と口角が上がってしまう。

誰が君を、こんな風に躰けたの。

私の留守の間に、泥棒もいいところだ。色事よりも喧嘩の好きだった中也から誘ったとは思えない。誰だろう、見つけ出して、

「殺してやりたいなあ」

思わず途中から口に出していた。中也のナカがびつくりしてぎゅつと私を締め付けたので、ああ、とつい素直に感じ入りながら、違う違う、君のことじゃないよ、と訂正してやる。安売りした君も、死ねばいいとは思っているけど。

少し逃げるような動きを見せ始めた腰を乱暴に掴んで、ぐぶぶ……と更に奥深くへと侵入する。雁首まで飲み込んでもう隙間無く栓をされていたその穴に、生々しく血管の浮き出た茎が押し込まれていくのを、他人事のように

鑑賞する。

「あ、あつ！ や…：もう、入んな…」

「はいんない？ …ふふ、かあわいい。自分から誘ったくせに、そんなこと言うんだ」

入んなくつても、入れちゃうのにね。

そう一応予告だけはして、窮屈な奥の粘膜へ根元までずつぽり埋め込んだ。彼がまるで焼けた鉄を押し当てられたかのような高い悲鳴を上げたので、それに煽られて腰が勝手に動いてしまう。

ずるずると抜いてやる素振りをすれば、ほつと息を吐いて脱力し、また奥まで啜えさせると、目をぎゅうつと瞑って身体をこわばらせた。互いの肌と肌とがぶつかる音が溢れ出す体液を含んで湿り出し、それが身体の内側から逆流したみたいに、中也の青い瞳からばたばたと零れ落ちた。

「泣かないで…：そんな顔されたらイツちゃいそう」

「…：…」

中也はじとりと私を睨み、少し悩んで、口の形だけで「へんたい」と罵った。お嬢様はそんなこと言わないだろうしどうしよう、とでも思ったのだろうか。

「そうだよ、君相手にこんなになっちゃうんだから、私はたぶん変態なんだ。ねえ、そんなことよりもさ、私は最初から中也としているつもりだし、もうその付け焼き刃の演技はやめなよ」

こつちにだつて、こんな強烈な光景を前にして、あの子とそつくりだなあなんて思う余裕はない。そもそも、大人しかかった気がするという程度の記憶しかないのだ。頬を紅潮させながら、彼はその顔でべつと舌を突き出す。へえ、そう、そういう態度するんだ。

だつたらいいよ。君を怒らせるのは私、得意なもの。いよいよばんばんに膨らんだ幹を彼の内壁で抜いて、私の下で彼の呼吸が下手くそになるのも構わずに腰を打ち付ける。ぶるりと背筋を震わせると、今さら慌てたように中也がばしと私の胸を叩いた。

「ま、て…：まって、だざいさ…っ！」

言うことを聞かない口を、乱暴に手で塞いで覆い被さる。歯で指の肉を噛まれたが、そんなもの気持ちがいいだけだ。ひときわずんと重くなった下肢をぐりぐりと押し付けて、一番狭いところで精を放った。

「あつ…うそだ、ろ、アッ！ てめ…」



「あー……きもちい……」

「ださい……！ やだ……！」

「あは……やつと普通に呼んだねえ……もう中に出しちゃったけど……」

もうちょっと我慢してね、と言って、両腕で彼の頭を抱き、よしよしと髪を撫でながら、最後の一滴まで搾り取ってもらう。

「う、はあ……や……出て……」

びくびくと自身の性器からも白濁を垂らしながら中では煙撃し、腹の中にそれを受け入れていた。

「いやだなんて言ってる……中出しされてイッチャうんだ、ちゆうや。やらしい……」

ここが私の出したもので満たされているのを想像すると、すぐにもまた勃ち上がりそうになったが、さすがにそろそろぶん殴られるかな、と思いい、そっと身体を離れた。とぶとぶ……とシーツの上に精液が溢れ出して、それを名残惜しい気持ちで見つめる。

「見てんじや、ねえよ……くそ、やろ……」

「大変なことになっているねえ」

お風呂で掻き出してあげようか？　と言って、汗ばん

だ前髪を掻き上げていた彼の手を取り指に口付けしようとしたが、中也はばしんとその手を払い、サイドボードに置いていた煙草を取って口に啞えた。サービスタイムは終了したらしい。

「誰の所為だよ、手前……処女を相手にゴム無し中出しは無えわ、まじ無えわ……振られるわけだ。死ぬ」

「うーん、耳に馴染んだ口の悪さがまるで実家のような安心感だ」

「嘘付け放蕩者。手前が里帰りしてんのなんて見たことねえよ」

「言葉の綾さ。……それにしても、少し会わない間に、随分と、その……芸達者に、なったものだね」

本当に聞きたいのはそこではなかったのだが、いつ経験したのか誰とどこでどうして？　なんて馬鹿な質問はどうしても出来なかった。だって私たちはそんな関係ではないから、自分たちが誰と付き合っていたかなんて、互いに報告し合うことはないからだ。

「……そうか？」

「そうだよ。がちがちに緊張して、キスだけで真っ赤になっちゃって。本当に初めてみたいだったね」

ナカもきつきつだったし、と付け加えた言葉に、重力を乗せたライターが飛んできたのをすんで躲した。

「そりゃあそうだろうな、実際初めてだったんだから」

彼はそう答えてベッドから立ち上がり、火の点いた煙草を啜えたまま、すたすたとバスルームへ歩いて行った。そっかあ、なるほどね。

「………中也、え？ ちよつと待って!？」

うるせえ入ってくんじゃねえ！ と叫んで投げられた

石鹼は、うまく避けることができなかつた。

第二話 壊れかけのテレビジョン

太陽が黄色い。

探偵社がいつも使っているクリーニング店が臨時休業したというので、与謝野先生が近所のコインランドリーで洗濯して来た医務室のシーツをビルの屋上に干す役目を仰せつかった。

昨夜も明け方まで自宅で飲んでいたから、昼過ぎに出社したら他の探偵社員は各々の案件で出払っていて、私しか使える人間がいなかったのだろう。

ランドリーにある乾燥機でついでに乾かして来たら良かったのでは？ と言ったら、お日様の匂いがした方が良いだろうと彼女は言った。不運にも此処の医務室に寝ることになった人間にお日様の匂いなんて感じる精神的余裕があるのかは疑問であったが、あまり気の長い方ではない彼女を怒らせても得はないし、オフィスにいたら新規の依頼が降ってきたとき自動的に私の担当にされてしまいそうだったので、そうですねと大人しくシーツの塊を受け取り屋上へ向かった。

物干し竿の上に整列してはたはたと揺れる白いシーツと、その背景に輝く青空を眺めながら、病院みたい、と独り言ちた。

結局のところ、私の目に映る世界は酸化したままだ。青も白も、お日様の色さえも、上から灰をまぶしたようにくすんでいる。

黄泉の国で見た虹色のゾウリムシは綺麗だったな。混凝土の床に落としていたコートの上に寝転んで、いつぞやの狂った幻覚世界に想いを馳せる。

ある種の、色盲というやつかもしれない。色が分からないのだ。いま生きているこの現実の世界のあらゆる色が。

百億の名画と自分が落描きした自画像の違いが分からない。青空と夜景の、何がどのように美しいのか分からない。誰かが隣でこれは綺麗だと言ってくれないと、化粧をして着飾って私は綺麗だと誇示してくれないと、適当に褒めそやすことさえ難しい。

十代の頃はまだ時々は何かに心動かされていた気もするが、近頃は自分自身の色すら疑わしい。どんな顔して生きているのかも怪しい。

硬い床に寝そべったままコートのベルトを手首に巻き付けて、また解いて、暇潰しにもならないことをして時間を浪費する。ポートマフィアを抜けたときに購入したペーリュのトレンチコートは、何度も川の泥水を吸って、砂色に変色していた。

織田作はこんな色だったかなあ。

たぶん違う。私はまだ夕暮れの隅っこで、それ以上明るい場所へ進むことも、暗い場所へ戻ることもしないで、たまに来てくれるバスを全て見送り、立ち尽くしている。

あなたの血はマフィアの黒だ、と芥川君は言う。

「どうかね」

そう云う偽善臭え処も反吐が出る、と中也は言う。

「……そうかもしれないね」

偽善、偽物なんだ。この私は。

夜の国には戻らない。でも所詮、昼の振りをした夜の国の人間なのかもしれない。

住い人間になれ、と彼は言い遣したけれど。

住い人間ってなあに？ 点数制？ 何点貯まれば住い人間？ この二年、肅々と人を救ったよ。その分だけ、悪い人間が死んだ。

私は今どのくらい、光に近づいているのだろう。

陽の下は眩しくて、どうしても目を閉じてしまうのに。

「……おい、起きんかこの唐変木」

「あー…百点の人が来ちゃったよう」

何の話だ？ と、いつのまにか私の日除けになる位置に立っていた国木田が、辺りに干されているシーツを見回して、まるで病院の様だな、と数分前の私と同じ感想を口にした。

「ご苦労だったな。しかし、こんな所に寝ていたら熱中症で倒れるぞ」

「ああ、そうだねえ…どれだけ体内の水分を失えば人は死ぬのか？ 脱水チャレンジというところかな」

「それなら貴様も洗濯機に入っぐるぐる回ってくれば良かっただろう」

「今日は嫌味が冴えてるねえ国木田君！ よしそうと決まれば早速コインランドリーに戻って」

「そうはさせんぞ！ 貴様、どうせ今日も遅刻して午前中に予定していた調査が一ミリも進んでいないのだろう。一緒に行つてやるから資料を持って来い」

「えー…面倒くさい…おかあさんやっというて…」

「俺はおまえの母親ではない！」

せめてお父さんだろうが、とズレた突っ込みをしつつ、ほらさっさとしろ人間失格、と急かしながら愛用の手帳で額を叩いてくる。地味に痛いし、この手帳は言うなれば私にとっての両手と同じものなんじゃないの。雑な扱いに苦笑して、渋々と立ち上がった。

予定していた聞き込みを終わらせて、探偵社に戻ってきた時刻には、既に皆帰った後だった。大した調査じゃなかったけれど、場所が静岡との県境でやや遠出になったので、結果的に一日仕事になってしまった。いや、もともと遅刻していたから半日仕事か。

「太宰、まだ残っていくのか？」

「んー：この報告書だけ片付けちゃおうかなって。明日になったらやる気なくなっていると思うし」

「貴様は本当に夜になると絶対調になりおつてからに：会議も夜にやりたがるし、そのテンションは上手いこと逆転できんのか」

「できないねえ：たぶん。あつ！ 善いことを思いついたよ！ 探偵社に早番と遅番を作らない？ 私、夜なら

元氣だよ」

「提案する分には構わんが、夜は俺達は勿論、事務員も誰もおらんぞ。来客対応も電話番号もコピーもファイリングも全部おまえ一人でやれ」

「そんなあ：嗚呼、この世はなんて世知辛いだろう」

お喋りしていた片手間に今日の案件の報告書はあっさり完成した。これから飲みに行こうよ、と国木田を誘ったが、昨日も飲んでいたんだろうが早寝早起きをしろと健全すぎる叱り文句で断られてしまった。

結局、施錠の作業が面倒なので国木田と一緒に探偵社のビルディングを出た。それじゃあね、と手を振って社員用の寮とは逆方向へ歩き出した私の背中に、程々にしておけよ、と釘を刺された。

だって、仕方ないじゃないか。

別に夜にやりたいことがあるわけでも、特別思い悩むことがあるわけでもない。でも、眠れないんだ。物騒な仕事で歩き回ることに比べたら、酒に溺れるくらいなんと健全なことかと思う。

「いい、天気だなあ……」

昼間に晴れていたからだろう。雲ひとつない夜空だった。街灯と誰かが残業しているビルの照明で星など見えないが、歩くのに何も差し支えない。分らないのは、行き先だけだ。

営業時間を過ぎて静まり返った遊園地の前を通り過ぎる。観覧車のネオンサインも消され、現在時刻のデジタル表示だけが白く光っていた。

インスタントヌードルの変遷を展示している変わり種な博物館の裏手には、海と石段だけの静かな公園がある。カップルと浮浪者が、同じ場所で同じ海を見ている。私も彼らから離れた石段に腰を下ろして、夜空をそっくり映した黒い海面が小さな波を立てるのを眺めた。

携帯電話に途中まで番号を打ち込んで、残りの番号を誰にしようか、頭の中の電話帳の頁を捲る。今日は誰かを抱いて、果てて眠ってしまいたかった。

あまり余計なお喋りをする気分ではない。男同士安い居酒屋で飲み明かすなら別だが、女性が相手では場所も話題も選ばねばならない。

物静かな子がいいなあ、と考えて、一人思い当たったが、そういえばその子には先週振られてしまったのだった。

たと候補から除外した。

あ、やばいな。思い出してしまった。

先週の出来事は記憶の箱の隅にしまい込んで嚴重に鍵を掛けておいたのに、うっかり錠前を外してしまった。たちまち相棒の顔や声やホテルの部屋に充滿していた匂いまでもがぼろぼろとまろび出てくる。

「結局…どういうつもりだったんだろう、あのちびっこマフィアは…」

あの夜、中也是シャワーから出るなり私が何を話しかけても一切無視しててきばきと身支度を整え、終いにはベッドに万札を数枚投げて出て行ってしまった。

これじゃまるで私がひどい男にやり捨てられた愛人みたいじゃないかと思ったが、部屋は宿泊で取っていたし、そういえば中也是翌朝早いんだとか言っていたし、私も早朝の歓楽街を追いかけっこする元気はなかったたので、それ以上の思考を放棄してベッドに倒れ込んだ。

あの日は、いつになく良く眠れた。朝だったので結局出勤時間には間に合わずに怒られたけれど、それはそれ。眠りに落ちる直前まで中也就たからだろうか、懐かしい夢を見ていた。



これ、どうしたんだよ。これ、どうしたの。

二人は互いに向けて、全く同時に同じ質問を投げた。

ポートマフィアの本部、表向きにはモリ・コーポレーションとそのグループ会社が入っていることになっている建物は、五つの棟がそれぞれ地下通路と渡り廊下で繋がった構造になっている。首領の部屋がある中央の棟を囲むようにして四方に幹部専用の執務室を持つ棟があり、元々は森首領の腹心として中央の棟に専用の部屋を与えられていた私は、五大幹部に昇格したときにその幹部のために用意された棟に移っていた。

中央の棟にいたころは、首領への報告や会議への出席のために来る中もとよく渡り廊下で出くわして、その度に伸びる気配のない彼の身長や服のセンスや、あの程度の任務によくあれだけ時間をかけられるねえなんて軽口を言っただけ怒らせたものだったが、場所を移ってからはその頻度はぐっと減って、ひと月顔を見ないことも珍しくなくなった。中也是尾崎幹部の棟に部屋を与えられてい

て、基本的には彼女の指揮下で動いていたから、私の棟に来る用事がなかったのだ。

つい最近終結した龍頭抗争、あの最中は、日に日に構成員の死体が積み上がる状況下で所属の垣根など気にしていられなかったので、組織を挙げて事態の鎮静化に奔走して、中もと示し合わせて動くことも多かった。だがそれも先日ようやく落ち着き、私はそのときの功績を理由に幹部の椅子に座り、皮肉なことにそれによってますます他の幹部の部下である中もを好き勝手に呼びつけることはできなくなっていた。

抗争の後に残った仕事は退屈なものばかりだった。ヒトもカネも失った組織にとって優秀な人材と資金集めは急務であり、首領の判断で私は後者を任されていた。手頃な資産家や企業に近付き、懐柔し、こちらが使える金貨に変える。要するにただの金儲けだ。

関西に顔の広い尾崎幹部も同様の目的で月の半分は西方へ出向いており、中也是彼女の同行で出張が増えた。

私は夜には電子遊技場ではなくバーにばかり入り浸るようになり、織田作と取り留めのない会話に興じながら、当時はそこまで美味いとも思っていなかった酒を飾り物

のようにただ眺めて過ごしていた。

だからこの日、中也が予告なくふらりと私の執務室に訪れたときのことを、私はよく覚えていた。

「やあ中也だ、久しぶりだねえ。帰還してはまたすぐ向こうへ行つてを繰り返しているようだけど、そろそろ関西弁で喋り出す頃じゃないの？」

「うるせえよ暇人、死ねどす」

「今回は京都かあ」

手土産に八つ橋の一つくらい買って来てくれてもいいのに、あつ、ちなみに私は硬い八つ橋の方が好みだよ。

私の座っている執務机の上に中也はほらよと言つて何かを置いた。関西のローカル新聞紙で雑に包まれた石ころだった。彼はこちらと目を合わせず、部屋の隅に雑然と置かれていた大型液晶テレビとゲーム機材を見て「これ、どうしたんだよ」「これ、どうしたの」私とほぼ同時に同じ質問をした。

「私の質問が先」

「俺の方が先だっただろ」

「君の質問の方は見れば分かるでしょ。テレビ、ゲーム、取引先がご機嫌取りに押し付けてきました、以上」

「子供のご機嫌取りじゃねえか。馬鹿にされてるんじゃないのか？ 最年少幹部殿は」

「そうだろうね。そんなことより、この石ころは何？まさか八つ橋の代わりとか言うつもりじゃないだろうね」  
手土産という意味ならそうだな、と言つて中也はゲーム機の前にしゃがみ込み、おっこれ発売前の最新型じゃねえか、俺にもやらせろよなどと喋りながら、一緒に送られてきたゲームソフトを物色し始める。

「はあく道端の石を啜えて帰ってくるなんて、その辺の犬の方がまだマシな物を持つてくるよ？」

「わんわん、わん」

「いま、『うるせえ、死ね』って言った？」

「よく分かったな」

「君がワンパターンの。：犬の躰について考えていたら思い出した。君、まだあの時にあげた首輪をしてきているのだね」

中也はまだこちらを見ない。なんだよこのテレビ壊れてんじゃねえのか？ ああ配線もしていねえのか、と、どうでもいいことばかり口にして、私はその後ろ姿を機嫌良く眺めていた。



「それ、欲しいならあげるよ。いらぬし邪魔なんだけど、前に取引先との会食で貰った物を外のゴミ箱に捨てたら見られて嫌味を言われちゃってね、すぐには捨てるな。森さんがうるさいんだ」

「首領と呼べつの。…なんだ太宰、寝るのか？」

「君が言うほど暇じゃないんだよ、私も…それに最近どうも夢見が悪くてね。何かこの先、良くないことが起こりそうなの…」

人集めも金集めも、私が一人で動いているわけではなかった。組織が困窮している今こそ昇進の好機と功を焦り独断で動かしたがる者もいて、異例の昇進を果たした私のような若造に従っている部下には特にその傾向が顕著だった。

そんな奴等一人一人に目を光らせてなどいらぬし、かといって、その程度のことではいちいち断罪していらぬほど人手に余裕もない。統率に綻びの生じた組織は、必ずそこに付け入られる。相談されたわけではなかったが、森もそれを懸念していることを知っていた。

対立組織、軍警、政府の特務機関、我々がボカを仕出かすのを待ちわびている敵は山程いる。何らかの方法で、

そいつらを黙らす一手が必要だ。それは金と暴力だけでは不十分で、もつとイレギュラーでずる賢い、異能という強大な力を使ってこの街に幅を効かせるのを黙認させるような、何か――。

「手前に未来予知の能力は無えだろ、夢は夢だ」

そんなことより、外してくれる気になったんならさつとこの重てえ首輪を外す条件を言えよ。

そう言った中也の声は、私が机に顔をくつつけて彼に背を向けたこととようやくこちらを向いていた。

「ふふ…：嫌だよ」

そんな勿体無いこと、まだできるもんか。

中也には見えないようにして、手の中にそつとしまつた素朴な石を眺める。種類まで見分ける鑑定眼は無いけれど、何かの宝石の原石のようだった。

こんな状態で貢ぎ物にする人間は極めて珍しいと言える。任務の褒賞として好きな物を持ち出して良いと言われたのか、あるいは彼の趣味でマフィアの給料何か月か分をほったらかしたのか、どちらにせよ、中也が何らかの意図を込めて自ら選んできたものなのだろう。

「そろそろこんな状況は…何とかしたいものだね。お金

欲しさに西の宝石商に媚を売るような仕事、いつまでも私のワンちゃんにはさせられない」

「……手前はその、答えが分かかってて質問する癖をそろそろどうにかしろよ」

それも無理かなあ、と笑った私の後ろで、呆れたように吐かれた溜息が聞こえた。

◇ ◇ ◇

さざ波の音に紛れて、ときどき魚がぼちゃんと跳ねて水面を叩く音がする。私から少し離れたところに座っていたカップルの女性の方が、見ていまお魚が跳ねたよ、可愛い、と言って手を叩く。あれは実際は、魚が自分より大きな魚から捕食されかかって逃げているときにする行動なのだが、男の方はそれを知ってか知らずか、何も言わず静かに頷いていた。

「……うん、決めた」

手の中で私の体温を吸って温くなっていた携帯電話の番号を押す。しばらくコール音が続いて、「……なに？」と怪訝そうに応答する女性の声が聞こえた。

「やあどうも。久しぶりだねえ。……え？ そんなに間が空いていたかなあ、それは私としたことが失礼したね。ああそうだったの、うーんどうだったかな、忙しくてね、そのときは出られなかったのかもしれない。ああそんなに何度もかけてたの？ 気がつかなかったなあ。それでどうだい、変わりはないかな？ 風の噂で結婚すると聞いたけれど、本当？ へえ、それは驚いた！ おめでたいこと続きじゃないか！ ぜひお祝いをしてあげたいな。今からどう？ ……今更って？ ちよつと意味が分からないけれど、ひよつとして都合が悪いの？ ……そういうことじゃないんだ、じゃあいいじゃない、会おうよ。そうだ、二人だけというのも退屈だから、他の子も呼んであげる。そういうの好きだったでしょ、…あれ？ どうしたの、ええ、なに？ 急に怒らないで、ちよつとちよつと待ってよ、少し落ち着いて——」

もう二度とかけてこないで！ 番号も消して！ とヒステリックに叫んだ声を最後に電話は切られた。まだ五分も話していない。

彼女は誰かに依存しなければ生きられない女性だった。「他に寄りかかれる人を見つけたのだね。お幸せに」

さて次は、と電話帳をスクロールして、『蛞蝓』という表示が出てきたところで止めた。

我ながら面倒な手順を踏んでいると思うが、私はこういう取引で嘘をつかない。君も知っていると思うけど。

ループタイの真中に光るペンダントヘッドを弄びながら、まるで十代の少年のようにわくわくした気持ちで、発信ボタンを押した。

「もしもし中也？　実は私、また振られてしまっただね」

夕刻、川で太宰を見た。

その日は交渉事の仕事を済ませ、部下の運転する車で帰る途中だった。オレンジ色の大きな夕焼けが川面にどろどろと溶けてゆくのを少し眺めていたくなり、橋の上で路肩に停まらせ、欄干に肘をつけて一服点けた。

下を見下ろすと、川べりに淡い黄色のワンピースを着た小柄な女が立っていた。太宰は砂色のトレンチコートポケットに両手を入れてその女と向かい合い、何やら話し込んでいた。心中の相談でもしているのだろうか。

あいつは本当にこの横浜に居て、当たり前前にほつき歩いているんだな、と偶然の遭遇に今更ながら思った。聞けば二年も前から探偵社に在籍していたと言う。異能絡みの事件を扱っていればウチと接触することも一度や二度ならずあったろうに、よく最近まで見つからずに逃げ回っていたもんだ。いや、俺や芥川が聞かされていないかっただけで、首領のところにはとっくに情報が届いていたのかもしれない。裏切り者の追跡と始末の役目から

自分があえて外されてきたことを考えると、きつとそうなのだろうと思った。

「……ああいう女がいいのか」

煙草の煙と一緒に、つい阿呆みたいな独り言を吐いてしまった。車で待っている部下に聞かれなかったのが幸いである。

昔から目に余る女誑しではあったが、もつと後腐れのなさそうな落ち着いた女を好んでいた気がする。趣味が変わったらしい。それとも、マフィアの幹部という立場から解き放たれていよいよ見境無く遊んでいるのか。

いづれにせよ、自分には関係のないことだ。

そう、関係がない。自分とあの男の間には、元々仕事上の相棒、双黒という名前の付いたコンビ関係があっただけだし、それすらも四年前のあいつの離反で解消されたはずだった。

あいつが組織を抜けたと聞いて、俺は心の底から歓喜した。一生観賞用に飾っておいても良いとさえ思っていたとおきの葡萄酒を開けて、我が身の解放を祝福した。誰にも伝えられず、ひた隠しにして行き場のなかった恋心からの解放を。

この胸の奥の一番深いところに、今もあの日にあいつと見た海の青と、空の青と、七色の虹が輝いている。息を切らせながら俺に首輪を持って来たときのあいつの表情はきらきら光っていた。俺はその光が、やがて電池切れしてしょんぼりと消えてくれるのを待ちながら、仕事に精を出していれば良かったはずだった。

再び出会ってしまい、またいいように揶揄われ、懐かしの作戦暗号で立ち回り、共に覚悟する死と確信する生の上で踊り、剥き出しの手を取られたらもう、たちまちそれは熱を取り戻し明滅した。

捨てたはずの恋の、続編が始まってしまったのだ。

「……だからどうだったんだ、くだらねえ」

今も昔も最低な想い人は、清純を絵に描いたようなお嬢さんの肩を抱いて何処ぞへと歩いていく。俺は黒のメルセデスに乗り込み、待たせたなと一声かけて発進させた。同じ街に居るから何だっただ。それでも俺とあいつとは、住む世界がもはや違っている。

……と、思っていたのに、昔から太宰が関わると、俺の運勢は地の底まで転落してしまうらしい。

いつも通り拠点から少し離れた場所で自分を降ろさせ、人気の少ない通りを選んで歩いた。路地裏にあったはずのおでん屋がいつのまにか潰れて、小洒落たバーが開店しており、その店の名前に引き寄せられて、気が付けばカウンターの一番奥に座っていた。

雰囲気の良いワインバーだった。少しだけ飲んで帰ろうか、明日の仕事は出張で朝早くから移動することになるからと、その日一番見たくなかった顔が隣に座るまではそのつもりだったのだ。

「君、まだその首輪をしてきているのだね」

「話しかけんな。つか、他の店行けよ」

太宰は昔から、俺のことが嫌いなくせに、顔を合わせると必ずちよっかいをかけてくる。悪戯が服を着て歩いているような男だった。

俺を揶揄うことだけが目的で、投げかけられる質問に興味などないこともしばしば。そうでないとしても、大抵の場合、質問してきた時点で答えを得ているか、答えを何通りか予測していて相手の反応を観察し絞り込んでいるのだから、聞かれたことに答えようと答えまいと、会話は太宰によって補完され、成立する。

相手からのボールはひよいと躲して、手元から新品のボールを出してきて投げ返してくるような、そんなこいつの話し方が俺は気に入らなかつた。直せと言ったのに、言つて直るもんでもなければ直す気もないらしい。

けれど、ひよつとしたらこれが女には受けるのかもしれない。特におしゃべりの好きな女には。どんなに脈絡の無いテーマや着地点の無い相談事しても、意図を讀んで適当な言葉を投げ返し、それなりに会話が成立しているようにしてくれる男は、気の合うパートナーに思えるのかもしれない。相手が大嫌いな相棒でないなら尚更、怒らせるようなことも言わないのだろう。

太宰は自分の問いに対する正解なんて求めちゃいない。他人が簡単に答えられるようなことで、こいつが分からないことなどありはしないのだ。こいつが質問したり相談したりするのは総じて暇潰しかその先の悪戯の前哨戦で、本気で話していない。

そう、それが嫌だつた。本気になってほしい。私たちはそうは思わないのだろうか？ 薄っぺらい作り笑顔でご機嫌を取られる関係などまっぴらだ。それなら自分は殴り合っている方が余程良かった。

……だめだ。さつきから太宰のことで頭がいっぱいになっている。さつきと置いて帰ってしまったおうとペースを上げてグラスを空にした。

このままここにおいて太宰と話してはまずい気がする。吸いかけの煙草を奪おうと顔を近づけたただけで少女のように胸がちぎれた。今の自分には侵入者の排除という大義名分も、首領からの勅命もない。平静を装うのに必死で、いつボロを出してしまうか分からなかつた。

おまえは知らないだろうけど、俺はこの四年、自覚してからは七年、心の中に太宰治を住まわせているのだ。本人の目がなくなつてからは気取られる恐れもないからと恥もプライドも失つて、身体に熱の溜まつた夜には幻の太宰の手のひらに触れられる妄想に明け暮れ、いまや太宰の指を宿らせた自分の指が触れていない場所はこの身体のだこにもない。気まぐれに声をかけてきた女を抱いたこともあったが、妄想の太宰とのセックスには到底追いつかなかつた。

俺はこの首輪を与えられたときからずっと、この恋と熱情に縛られている。そんなことも知らず、太宰は呑気に「今日振られちゃつた」などと話し出す。

ああ、あの川辺にいた女かと、口には出さず太宰の包帯で隠された喉元を見つめた。奴がべらべらと喋る度に微かに上下する喉仏に喰らい付きたくて奥歯がきしきしと鳴った。

ふと、その胸元に付いていた宝石に目を奪われた。マフィアにいた頃には決して装けなかったであろう趣味の悪いループタイのペンダントヘッド、それに自分は見覚えがあった。

意中の女性にいかがですかと、京都の宝石商が手揉みしながら薦めてきた指輪やブローチの中にあつた、光の反射で色の変わる寶石、アレキサンドライト。手の中で蒼、翠、赤、紫、とところ変わる胡散臭さがまるであいつのようだと思つた。思わず笑つた自分に、こちらを包みましようかと宝石商が言つたのだが、まさか指輪など贈れるわけがない。嫌がらせということにしようとしたつて、その種明かしをどうすればいいのか思いつかなかつた。それで俺は、加工しなければそれと分らないように、アレキサンドライトの原石を贈つたのだ。

そんなはずがない。自意識過剰だ。だって六年も前のことだぞ。一度渡したつきり、何かに加工した様子もな

ければ、あの原石さあと話題に出されたことすらなかつた。とつくに捨てたはずだ。

俺の心中の動揺には気付かず、女性は無残だの何だのと益体もない愚痴をこぼしている太宰の心臓に人差し指を当てて、もつとよく見ようと顔を近づけた。

「一番残酷なのは手前だよ、馬鹿。世の女性たちのためにもさつさと死んでくれ」

おどけて銃で撃ち殺す振りをして、離れる。

「ちょよ……ちよつとなに、気色悪いことしないでよ」

「……嫌がらせだよ、色男」

間違いない。どうして二度も会つておいて気がつけなかつたのか。あれは自分が贈つた、彩度の強い稀少なアレキサンドライトだ。今では市場に出回っていないはずだし、少なくとも一介の探偵社員が普段使いできるような代物ではない。

なぜ。なぜ今更、そんなものを身に付けているんだ。自分と離れていた間、まさかずつと？ どつとつとつと心臓が早鐘を打つ。だめだ、だめだ帰ろう。いや、逃げよう、この場から。期待するだけ馬鹿を見る。数多の女たちと同じように、誑し込まれてしまう。

注ぎ足されたばかりの葡萄酒を無作法に飲み干し、席を立った。しかし太宰は、俺の胸中など知らないくせに、絶対に回避できないやり方で逃亡を阻んだ。

あの十五のときの約束を、ついに使ったのだ。それも、期待外れも甚だしい内容で。

俺に、おまえを振った女の、おまえに抱かれたであろう女の、穴埋めをしろと言うのか。やっぱり残酷なのは手前じゃねえか。

九割の確率で、あの約束は永遠に使われることはないだろうと思っていた。けれども残りの一割の確率で、いつか太宰が窮地に及んだとき、自分の力を必要として呼びつけられるのではないかと、もしそのときが来たら、そのただ一度だけ、俺は組織に背いてでも約束を果たそうと思っていた。

それがよもや、こんなくだらないことで消費されてしまふとは。長い間拘束されていた自分の首に同情する。俺は一度外した席に座り直し、コーヒーを一杯注文した。好い機会なのかもしれない。いい加減この屑の言動に振り回されるのにも飽きた。おまえがそんな風に俺を軽んじるのなら、俺もまた、おまえを取り巻く数多の女た

ちと同じように振る舞い、相棒なんてむず痒い関係性を終わらせてしまおう。全てを曝け出し、興味を失わせ、二度と俺の前に現れないように。

コーヒーに一粒砂糖を落とした。それはおまじないのつもりだった。この甘い菓を飲み干したら俺は、女になる。意地を張ることも、恥ずかしがる必要もなく、真っ直ぐに好意をおつけ、惚れた男の情を求め、女に。

そしてその日、初めて太宰に抱かれた。

悪夢のように甘美な夜だった。途中で逃げ出すかもしれないと思っていたが、俺の妄想は女の皮を被ることですとうとう現実のものとなり、その翌日も、そのまた翌日も、太宰からの連絡はなかった。

◇ ◇ ◇

そこで終わると思うだろ？ 俺はそう思っていた。しかし、昔から一度として俺の思い通りにはなっちゃくれないのが太宰治という男である。一週間後、奴から突然電話があった。「もしもし中也？ 実は私、また振られてしまつてね」開口一番がそれだった。



念じただけで相手を殺せる異能力者とかいないものだろうか。いたら是非ともスカウトしたい。首領にも探偵社の連中にもばれずにこの糞野郎を葬り去れたら良いのに。けれどもそんな異能があれば間違ひなく特務課の監視対象だろうし、首領の意に背いて勝手にこいつを死なせることなどできはしない。結局、俺はこのこと再び太宰の元へ赴き、角砂糖を噛み砕いて女になった。そしてその日から、毎週太宰と会っている。

「あの……今日はなんつうか、珍しいすね……」

「あ？ 何がだよ、立原」

「いや、その、中原幹部がわざわざシマの見回りなんて、何か不穏な動きでもあるんすか」

ハンドルを握りながら、フロントミラー越しに茶髪の青年がそう尋ねた。

「知りたがりは早死にするって習わなかったか？ いいから黙って運転してろ」

「はあ……」

もしそうなら、俺なんかより芥川さんと呼んだ方がいいんじゃないかと思っただけです、と言って、立原は車線変更し、数台追い抜いて車を走らせる。

芥川なんて呼べるか馬鹿野郎。大騒ぎされて面倒なことになる。なぜなら今日もこれからマフィアが管理している店で太宰と待ち合わせしているからだ。

バーで太宰と会った夜から三ヶ月、これで会うのは十度目か。十度目……十度目？ もう十回もあいつとヤツてんのか俺は？ あの野郎、何が「私ほどのいい男がそんな程度も振られると思うかい？」だ！ 週一で振られてんじゃねえか！ 浮名を流した太宰治ともあろう者が、見るも無残な状況である。それを慰めるのに毎回付き合わされている俺も悲惨だ。やっぱりあのとき、一度きりという条件を譲るべきではなかったと今更ながら後悔した。つうか、定期的に会ってヤツてのこの状況は、ひよつとしてひよつとしなくても、所謂「セフレ」というやつなんじゃねえか？ 吐き気を催すその単語に帽子を取ってわしわしと髪を掻き耨る。

一度目は初心なお嬢様、二度目はヒステリーで依存癖のある女、口の悪い元ヤンに、マグロなOL、被虐趣味の看護婦……中でも『とにかくいっぱい喘ぐ子』という役が来たときが最悪だった。いくらこれは俺じゃない、女を演じているだけだと自分に言い聞かせたところでそれ

をしているのは俺なのだから、羞恥の限界というものがある。コトが終わって素面に戻ったとき、舌を噛み切って死にたくなつたほどだ。

その心の傷もようやく癒えたかと思つた矢先に、また太宰から連絡があつたのだ。

流れ者のチャイニーズの猥褻的な風俗嬢に振られたらしい。フェラのテクニクがすごかつたと、昼間つからそんな話聞きたくねえよどこで話してんだ手前はと言つたと「探偵社だけど？」と平然と答えた。セクハラで訴えられて死ねばいいのに。

しかし風俗嬢とは、ハードルが高い。

処女の演技は簡単だつた。実際、初めてだつたのだから。そういえば事後にそう明かしたときあいつは随分と動揺していたが、あいつは俺を一体何だと思つていたのだろうか？ 男も女も見境なく手を出していたのだと思われていたとしたら心外である。太宰治じゃあるまいし。かといって追求されても厄介だったので、その日は余計なことを聞かれる前にあいつをホテルに置いて先に出た。いい歳して一人遊びのキャリアの長さなど自慢にもならない。次に会つたときそこを突っ込まれるかと思つ

ていたが、意外にもそれ以降、太宰がその話題に触れてくることはなかつた。

二度目以降も、まあ何とかなつた。太宰が仕掛けてくることに對して、キャンキャン喚いたり、大人しくされるがままになつたり、羞恥心をかなぐり捨てて快楽に身を任せてしまえば良かったからだ。あいつの女の趣味の一貫性の無さにドン引きではあるものの、俺は約束通りに振る舞っていたとは思ふ。

だが、今回は俺が主導権を握らなければならない。なんせ「猥褻的」な「風俗嬢」だ。相手の出方を待つてぼさつとしていくわけにはいかない。その上、口淫の腕前が凄くないといけないらしい。男のブツを啜るなんてこと、一度もしたことがないというのに、それを知っているはずなのに、急に無茶振りも甚だしい。

電話口で女の特徴を一通り聞いた後、少し時間をくれて言つたのだが、俺がそう言うであろうことを予測していたように即座に却下されてしまった。「今夜。場所だけは中也が指定してもいいよ」と、女に振られつ放しで俺で穴埋めしている分際で何様のつもりなのか、反論を許さぬ口調でそう言つた。

大急ぎでその日の仕事を片付けたが、約束の時間まであと二時間しかなかった。今から飛躍的にそっち方面を上達させることは不可能だろう。だとすれば、せめてたどたどしくともそれっぽく見せて、下手なりに経験豊富そうに演じている俺を見て笑ってもらえばいい。どうせ、ヤツの目的はそれなのだ。練習時間を与えないのは、本当に超絶技巧の風俗嬢のように振舞ってほしいわけではなく、そういう設定なのに全然出来ていない俺を眺めて揶揄したいだけなのだろう。

「中原さん、着きましたよ」

立原が車を停めた。貧民街と倉庫街の境目に建つ『RED LIGHT』という看板を掲げた会員制クラブは、尾崎幹部の配下の女性構成員だけで構成された『女郎蜘蛛』というチームが運営している娼館である。

「ああ、ご苦労だったな」

「俺はここで待機で良いっすか」

「そうだな……なんだ、てつきり鼻の下伸ばしてついて来たがるかと思っただがな」

俺の軽口に立原は勘弁してくださいよ、と首を振った。

「俺が消し炭にされたら、幹部を誰が送るんですか」

「阿呆かテメエは。火焰太夫に焼いて貰える程の情報を持つてるなら、そんなイイ目を見る前に獄舎行きだ」

あと、俺は一人で帰れる、と言ったら、立原はトレードマークの鼻の上の絆創膏を指で擦りながら、獄舎なら一度経験済みっすよ、と言つて笑った。

「ああそうか、テメエはギャング上がりだったな」

根性のある奴は好きだぜ、と言つて車を降りる。慌てて立原も運転席から降りて来て、後部座席のドアに手を掛けた。上司が単独行動の多い芥川だから、こういうことには慣れていないのだろう。姐さんからマフィアでの立ち振る舞いを教育される前の自分を見ているようで、懐かしい感情にかられた。

「おやまあ、珍しいお客だ。土産物はその坊主かい？」

店の前に直立している黒服のガードマンを柱のようにして寄りかかり、艶やかな黒の着物を着崩した女が俺たちを声をかけた。

「よお、久しぶりだな。太夫自らのお出迎えとは、痛み入るぜ」

残念だがこいつはただの運転手だ、悪いが今日は時間がない、生贄は後払いにさせてくれ、と言うと、なんだ

つまらんな、と嘆息して店の中へ戻って行った。

「立原、これから武装探偵社の奴が一人ここに来る。それいつは通せ。他は通すな」

「えっ、密会っすか。またどこかとの抗争とか」

そんなに早く死にてえのか？ と睨み付けると、すんません聞きません、と慌てて頭を下げた。

立原を外に残して店内に入ると、薄暗く長い廊下の途中で太夫が壁に凭れて煙管を吹かせていた。

「それで？ 幹部殿がこんな場所まで何の御用か。まさか同窓会でもしようというわけでもないだろ」

「同窓会か。ある意味そうかもな」

これから太宰が来る、と俺が言うと、彼女はあからさまに不愉快そうな顔をして、あの裏切り者か、あいつは嫌いだ、と言った。

「それについては同意見だが、やむを得ない事情がある。何も聞かず、また、何も言わずに通してくれ。会うのは俺一人だ」

「……それは幹部としての命令か？」

「いや、同期のよしみってやつを期待したお願いだよ。勿論タダでは言わねえさ。近々、中堅の対立組織を一

つ潰す計画がある」

「ほう」

「そこで生け捕りにした奴を、最低でも二十人、うまくいきやそれ以上、アンタに捧げる。拷問前のキレイな体でな」

なるほど、魅力的な取引じゃないか。彼女は声を上擦らせ、側に飾られていた花瓶に灰を落とした。

「いいだろう、奥の部屋を好きに使いな。命知らずな輩が覗きに行かんよう人払いをしておく。おまえが今夜来たことも、朝までには忘れておくよ」

そう言って、煙管の先で要人接待用のVIPルームを指し示した。あそこなら、中での出来事が外に漏れ聞こえることもない。

「感謝する」

「礼などいらん。約束を忘れるなよ」

この店で火焰太夫と呼ばれているこの女は、ほぼ俺と同時期に組織に入った、いわば同期だ。姐さんが教育のつもりで俺を任務に同行させるときには必然的に一緒にいることが多く、どこで衝突したのかほぼ同じ同期である太宰を嫌っていて、その一点で気が合った。

組織には珍しくもないが、純然たる人殺しを動機としてマフィアに参加した女だ。彼女の異能力は、自分と性交した人間を焼き殺すというもので、異能力で発現した炎はその対象だけを燃やし、他に燃え移ることがない。

あちこちの組織を転々としてきた過去があり、出会ったときから格闘術も情報収集力も組織の中で並外れていたが、彼女が任務を請け負うときは、対価として『焼き殺してもいい人間』を求めた。

それゆえに、言ってしまうと扱いが難しく、拷問対象の後始末を兼ねて、この店を任せられるようになったというわけだ。

「丁度退屈して、此方から何か美味しい仕事はないかと姐様に尋ねようと思っていたところだった。気の利く男になつたじゃないか。出世するわけだよ」

「機嫌を良くしてくれたなら何よりだ。満足してくれたんなら、ついでにもう一つ他言無用で教えて欲しいことがある」

「何だ。言ってみな」

「男を籠絡するやり方を教えてくれ」

下衆な質問だと取られないように真面目な顔でそう尋

ねたら、彼女は手に持っていた煙管ごと花瓶に落つことして、それから建物の外まで聞こえるほどに爆笑した。

◇ ◇ ◇

太宰は時間通りにやって来た。

全く参考にならない口頭伝授と、頼んでもない衣装替えと化粧までされて、パウダールームでげっそりと天井を仰いでいたところで、来たぞと声をかけられた。

あいつと話したか、と尋ねたら、別の人間に部屋まで案内させたと太夫は答えた。何も聞かない、何も言わない約束だからと。

「あたしが顔を見れば、またろくでもない嫌味を寄越してくるだろうし、害されれば此方もやり返したくなってしまうからね。朝まで別室に引っ込んでいるとするよ」

「……前から不思議だったんだが、アンタはいつたい何でそこまであいつを怒らせたんだ？ 部隊も違ったし、そんなに接点も無かっただろ。あいつは嫌な野郎だが、敵でもない女相手にそこまで悪意を見せることはない。弱味でも握ってんのか？」

「だつたら言い値で買うから売ってくれ、と言いなながら立ち上がり、鏡の前で髪を直していたら、彼女はその鏡越しにうっそりとした微笑みを向けていた。

「敵だと認識されていたということだろ。言っとくが、あたしが先にあいつを嫌つたわけじゃない。あいつがあたしを嫌いだから、あたしもそれをお返しただけだ」

そして、怖気付いてないでさっさと行きな、と言って俺を部屋の外へ追い払った。

「誰が怖気付いてんだ、誰が……くそっ」

クラシッくな彫刻の施された真つ赤なドアの前まで来て、俺は、実際怖気付いていた。今日はプライベートだし、びびって帰っても許される気がする。

さっきの部屋に帽子も置いてきてしまったし、寄る辺ない気持ちとはまさにこのことだ。あ、そういえばいつもの角砂糖も齧らずに来てしまったではないか。陳腐なおまじないとはいえ、習慣にしていたことが抜けていると気づいてしまうと、無性に緊張感が増してくる。どうしよう、一旦戻ろうか、と、柄にもなくまごついていたら、向こうから扉が開かれて、「何してるの？ 入りなよ」と太宰が顔を出した。

「——っ!!」

その姿を目に映した瞬間、ばたん！ と大きな音を立てて思わず扉を閉めてしまった。驚いた太宰が、ちょ、ちよつと何？ と不可解そうにぐいぐいと開け返そうとしてきて、変な力比べのような光景になってしまふ。

「てめ……なんだその格好！ いつものだつせえコートはどうしたんだよ！」

「ええ？ 君が格好のこと言うの？ 何だも何も此処、ドレスコードあるじゃない」

「あ、ああ……そうかドレスコード……いやだからって、その怪我とか手前……」

いいから早く入りなつて、と言って、太宰は俺の腕を掴んで強引に部屋の中へと引きずり入れた。ゆっくりとドアが閉まり、静まり返った室内に、かちりと内鍵の掛けられた音が響く。

今日の太宰は、この数ヶ月で見慣れたくたびれたトレンチコートも、ストライプのシャツも身に付けておらず、白いシャツに黒のスーツ、上等な黒のコートを羽織っていた。片目は包帯で隠れ、左頬に大判のガーゼを貼り付けている。

なんだ、俺は、とうとう妄想と現実の区別がつかなくなってしまうだろうか？　これはあまりにも、俺の知っている、俺の中にだけ今も住んでいる、あのころの太宰治ではないか。実物はあれから歳を重ねた分だけ、妖しい魅力を増している。

「いやはやそれにしても、確かに彼女はチャイニーズだとは言ったけど、それでチャイナドレスというのは安直すぎない？　お化粧までしちゃって」

「……うるせえ。太夫の見立てだ」

喉元からじわじわと熱が広がる。全身が発情している。なんて簡単な身体だろう。こんなクソ懐古趣味なコスプレ一つで、自分はこの男に心底参っているのだと、思い知らされていた。

「ああ、あの蠮螋女。此処は今彼女は彼女が任されているのだったね。今も同期で仲良くしてるわけ？　会社員じゃあるまいし、気持ち悪い」

「手前が無茶なリクエストをするからだろうが。準備の時間も与えねえで」

「はは、準備ねえ。時間があつたら、どこで何を練習するつもりだったわけ」

それとも、私を待たせている間に、現役の風俗嬢から実地で教えてもらっていたのかな？　平坦な口調でそう尋ね、指先で俺の襟足を撫でる。

その指を冷たく感じるのは、きつと俺の肌が熱くなっているからだ。居た堪れずに首を振ってその手を払いのけ、客人にそうするように、太宰のコートをそつと脱がせて、ソファアの背に掛けた。

「中也がなかなか来ないから、暇潰しにこの部屋の隠し武器を全部見つけちゃったよ」

そう言われて足元を見ると、床の上にナイフやら拳銃やらがごろごろ転がっている。VIPルームが聞いて呆れるね、とひらひら手を振って、太宰は一人掛けの椅子に腰を下ろした。

「マフィアの店なんだ、当然だろ。つうか誰が片付けると思ってたんだ、つたく……」

「ここを指定したのは中也でしょ。中也が片付けたら」  
太宰は突き放すようにそう言ったのと同じ口で、こっちにおいて、と甘く囁いた。

片方しか見えない目の中に、どろりと濁った欲望が揺れていた。その眼差しに何を期待されているかは明白で、

俺は履き慣れないヒールの靴でふらふらと太宰の足元に  
跪き、よく磨かれた革靴の甲を撫でた。両手でそれぞれ  
の足首から太腿にかけてさすり上げ、洞窟の亀裂に自ら  
の身体を潜り込ませるようにして頭を埋めずめた。

くしゃりと髪を撫でられる感触がこそばゆい。

こんなことが、前にもあった気がする。骸骨のときか。  
あのときは、体力の限界状態にあっても、ちゃんと抵抗  
できたのに、今の俺の有様をあのとときの俺が見たらどれ  
ほど嘆くだろう。許してくれ、ポートマフィア五大幹部  
の中原中也。もはや俺にも、この遊戯がいつ終わるのか  
検討もついでいないのだ。

ベルトのバックルを外して、ジッパーを歯で噛んでじ  
りじりと下げる。きつとわくわくと意地の悪い表情で俺  
を見下ろしているのだろう太宰の顔を見られない。

本当に、いったいいつ、このゲームを終わりにしてく  
れるのだろう。最初の一回こそせて身体だけでもと思  
いはしたが、好きだという気持ちを隠したままで身体だ  
け満たされ続ける今の状況が、辛くなってきていた。

今日に至っては演技もクソもなく、それは飲み忘れた  
角砂糖のせいだけではたぶんなくて、毎回どんなにこっ

ちが太宰の女の演技をしてみたところで、太宰は最中に  
俺を普通に名前と呼ぶし、私は最初から中也としてい  
つもりだ、などと言うから、なし崩しにずるずると、演  
技なんて形ばかりになって、ただ二人で妙な設定を持ち  
出してセックスしているだけになっているのだ。

こうなれば、太宰にとっては、相手が俺である必要な  
んでとうにないのではないか。俺が嫌がらずに呼び出し  
にに応じている時点で嫌がらせの目的は成立していないし、  
女の演技をしなくていいと言うなら、見世物になるよう  
な物珍しいことも何もない。

そろそろこの劇をお開きにしたい。このまま、電話を  
貰って待ち合わせ、欲情した目で見つめられることを続  
けていたら、勘違いをしてみたいようになる。隠してい  
ることを全て、打ち明けてしまいたい。

こんな馬鹿みたいな格好をしておまえに奉仕している  
俺を見たら、なあ、もういいだろ？ おまえの生来の悪  
趣味もいかげん満足だろう。これを最後に今度こそ、  
俺をもう一度解放してくれないか。

どうしたの、ここまで来てびびっちゃった？ と、ら  
しくもなく掠れた声が降り注ぐ。誰に興奮してんだよ、



おまえは。本当に見境のない男だ。

「うるせえな。焦らしてんだよ……そのくらい分かれよ、探偵なんだろ」

下着をずらすと、押し込められて窮屈そうにしていた性器が飛び出して俺の頬をべちんとぶった。汗と、それだけではない秘された匂いが立ち込めて、生唾を飲む。

反り上がった裏筋にそっと親指の腹で触れて、具合の悪い場所を診るようにゆっくり上下にさすってやると、でこぼこに浮き上がった血管の一つ一つが、かすかに脈打っているのが分かった。

生きている。この茎の中で粘ついた精液が作られて、誰かにごくりと飲み干してもらえるのを待っている。

今夜は俺が、その誰かだ。

真紅の紅を引かれた唇で、ぶるんと膨らんだ亀頭に口付けた。さっきまで俺の頭を撫でていた大きな手が、耳朶をすりすりとしり始め、前髪を掬ってそこに掛ける。顔を見られたくないからわざと前髪を長く作ってきたのに、ほとほと性格の悪い奴だ。

もう二度と、他の誰かなんて現れなければいいのに。

そう思う気持ちがある。

でも、どこかで他の誰かがこいつを振ってくれるから、俺はこの目に見つめられ、この手に触れてもらうことができる。そう思う気持ちもあるんだ。

「……もう、うるうるしてる。君って、辛くたって全然泣かないくせに、どうしてこういうコトしているときは泣いちゃうの」

「うるへえな……くるしいからだよ、このくそでかばかちんこ、あごがはずれれわ」

「口が悪いなあ。折角可愛い格好してるのに」

舌で太宰の陰茎を湿らせながら、唇の裏で上下に抜き、歯が当たらないよう頬の粘膜に先端をこすりつけながら、もごもごと咀嚼する。

はあ、とぼんやりした目で俺を見ながら、太宰は息を吐き、太宰の形に膨らんだ俺の頬をつんつんと指で突っつけてきた。

やめろ、じゃますんな、と一度口を開けて文句を言ってやり、口の中でまた太くなった幹を手のひらに包んで抜き上げながら、先っぽをべろべろと舐めて、もう片方の手で陰囊を柔らかく刺激した。

「……きもち……いいかよ」

自信がなくて、つい聞いてしまった。たぶん太宰の相手をしていたフェラの上手い風俗嬢はこんなこといちいち聞いたりしなかったと思うが、太宰はそこを突いてからかってきたりはしなかった。うっとりした声で、驚くほど素直に「うん」と答えた。

「ね、もっと喉の奥まで啜えてほしいな：中也の口の中を出して、中也に精液を飲ませたい」

「すっ…：…なお、すぎんだろ、手前は…」

「駄目？」

「だめ…：…じゃ、ねえよ」

惚れた男から、そんな熱っぽい声で名前を呼ばれ要求されたら、断れるはずもない。

でもおまえは、俺の気持ちなんて知らないくせにな。どうして俺が断らないのか、その出来の良い頭でちっとも考えちゃくれねえのか。そんな感情が去来した。それを振り払うつもりで、ぼくとひと思いに啜え込んで、一心不乱にしゃぶった。

「ふ…：…いい眺め…：…」

太宰の満足気な声が降り、舌先にえぐい味。鈴口から透明な先走りが溢れてきた。俺の口で、イキそうになっ

ている。そう思ったらひどく興奮した。腰のあたりがずきずきと疼いて、思わず膝立ちになっていた両足に力が入ってしまう。

反応してるね、と言って、太宰は半勃ちになっていた俺の性器を革靴でゆるく踏みつけた。

「私のを啜えてるだけで感じちゃったんだ」

「んっ…！ ふ…：…むうっ」

「ああ、歯を立てちゃ駄目だよ。そんなことされたら、びっくりして中也のココ、踏み潰しちゃうかもしれない」

痛みはなかったが、ぐりぐりと靴の裏で踏みつけられている状況に、男としての本能で恐怖を感じ、全身が固くこわばった。

それなのに、俺自身は萎えるどころか、太宰から与えられるその刺激にも感じ入り、腰が揺れてしまう。

「…こういう風にされるの、好きなの？ 飼い主の足で気持ち良くなったりして、本当にワンちゃんみたいだね」

「わんわん、わん」

「いま、『うるせえ死ぬ』って言った？」

「ハズレだ。さっさとイけ、タコ」

「うーん、犬語って難しい」

それじゃちよっと手伝ってね、と言って、太宰は俺の後頭部に手を添えると、ぐっと根元まで深く啞えさせた。

「だざつ、ん！ んーっ！」

「ああ：ちゆうやの口の中って、あつたかくて、小さくて、すべすべしてて、すぐきもちいい……」

「うぐう！ む、ぶほっ！ あめ：っ！」

「喋ろうとしたら吐いちやうよ？ 鼻で息をして、そのまま、力を抜いて……」

口の中いっぱい以太宰の雄を詰め込まれて、喉の奥をこんこんとノックされる。胃液が出そうになって、言われた通りに全身を脱力させ、されるがままに口内を蹂躪させた。ぬる、ぬるぬる、と頬の裏側の粘膜を濡れたペニスが摩擦していく。ぼうつとしてきた頭でも、太宰の靴の下にいる自身が、下着の中でびしゃびしゃに濡れているのに気づいていた。

「ん…出すよ、中也。ちゃんと飲んでね」

がちりと俺の頭を拘束して、太宰は俯き、ぶるりと身体を震わせた。喉の奥が生温かい液体で満たされていく。うまく飲み切れずに変なところに流れ込んで、鼻がつんと痛くなった。酸欠で目玉がひっくり返りそうにな

りながら、至近距離でじつと俺を鑑賞する意地悪な瞳を見つめ返していた。

ずるりと柔らかくなったペニスが出て行くと、口の中がふやけたような変な感覚で、すぐには言葉を紡げない。太宰は俺の鼻の下を指ですいと拭って、やっぱり少し逆流していたらしい精液を取り除いた。

「ふふ、汚い顔」

「げほっ…誰がそうしたと」

「私だね」

ほとんど後半は自分勝手に動かして射精したくせに、上手だったねなどと嫌味を言って、太宰は俺をその場に立たせ、床に散乱していたナイフを一本拾い上げた。

「…おい、SMには付き合わねえぞ」

「傷付けたりしないよ。見つかったら、私から休戦協定を破ったことになってしまからね。でも、危ないからそのまま動かないで、中也」

ひたり、と首筋にナイフの刃が当てられる。襟の隙間から潜り込んだ切っ先が喉仏を掠めたかと思つた直後、そのまま垂直に胸元の布地だけが切り裂かれた。

「なっ…にすんだ、手前！」

「いいじゃない。君の私物じゃないんでしょ」

「私物なわけあるか！ だから悪いんだつつうの！  
あーあ：借り物なんだぞ、これ！」

十分な対価は提示しているので怒られることはないと思うが、この格好を見られたら太夫に何と言いつつ朝まで別室に居ると言っていたから、夜明けまでには帰らなくてはと思った。

「他人の見立てで着せ替えさせられているのは、なかにか面白くなってねえ。これで少しはマシになったよ。うん、よく似合ってる」

でもどうせなら、下着も女物にしてくれたら良かったのに、と人の物を駄目にしておいて悪びれもせず言う。「そこまでサービスできねえよ。これだって、着たくて着たわけじゃねえ：おい、なに脱がせてんだ！ もうしてやったらうが！」

「え？ さっきので終わりだと思ったの？ そんなわけないでしょ。それに、もうこの下着、履いていられないんじゃない」

足のスリットから太腿をまさぐって、俺の下着をずり下ろし、ほらね、と笑いながらそれを床に落とした。

裾ぎりぎりまで裂かれてしまったドレスを捲り上げられて、だらしなく涎を垂らしていた自分の半身を大きな手で握り込まれたら、それだけで膝から崩れ落ちそうになつてしまった。おっと、とすかさず腰を抱かれて支えられる。

「一緒に擦って気持ち良くなるうかと思つたけど、腰の高さが合わないねえ、いやあ残念」

「……死んでくれ、まじで」

「そんなふらふらで凄まれたって怖くないよ」

ねえ、座ろうよ、と手を引かれ、太宰のコートを掛けていたソファーへと導かれる。

「相変わらずちっちゃいくせに重いなあ」

覚えている？ 昔、君が任務で重症を負ったとき、私を手当てしようとして医務室へ運んであげたときのこと。君つたら重いわ服を脱がせようとしたら大暴れるわで大変だった。あのときも、今みたいに着ていた服を切つて応急処置をしたよね。

穏やかな声でそんな昔話をしながら、太宰は先にソファーに腰を下ろして、自分の膝の上に俺を座らせた。

「さあ………忘れたよ、そんな昔のことは」

嘘だ。本当は覚えている。あのときは、息がかかるほどの距離で直接肌に触れられて、心臓の音で己のよこしまな感情が見透かされてしまうのではないかと、とても恐ろしかった。あのころの俺は、代替不能な相棒という関係に執着していて、それを失うことが怖かった。

それが今は、自ら進んで女の代わりを引き受けているだなんてな。落ちぶれたもんだ。

「なあに？ 急に思い出し笑いなんてして。空言は感心しないなあ」

「うるせえな。笑うくらい好きにさせろよ」

臍の下まで裂けたドレスの間に、太宰が顔を寄せる。形の良い頭に生えた黒い蓬髪と、顔にひっ付いたガーゼの感触がくすぐりたい。欲情して膨らんだ乳首を舌で転がされると、思わずその頭を抱え込んでしまう。

「苦しいよ、中也」

くすくすと、まるで恋人同士の睦言のように優しく笑う声が胸がひりつく。上等なシャツが汚れるのも構わず、すっかり勃ち上がりっている俺の陰茎を腹でもどかしく擦りながら、湿った下生えをかき分けて、後孔を指で刺激した。

「あつ…う、おい、そんなところ…吸ってどうすんだよ、いつもいつも…」

「…キモチイイクせに。『そんなところ』で感じちゃえるくらい、自分で開発したんでしょ」

「んっ！ んあ…ゆび…や、あ、あ」

もう何度も暴かれた身体の内側は、どこをどう刺激されたら弱いのか、すっかり知り尽くされていた。長い指でかき混ぜられたらたまらなくて、もつともつとと入口がひくついてしまう。

「それとも、最後までではシてないだけで、誰かに教えてもらったの？ 男？ それとも、こういう趣味の女の子と付き合ってた？」

「な、に…なんで手前が、そんなこと…」

互いのそんな話、干渉し合うような仲ではないというのに。太宰は初めての夜も、それから重ねた夜にも聞いてこなかったことを俺に尋ねた。

「…やっぱりね、分らないんだよ。誰かにされたのでも、君が夜な夜な一人で慰めていたのだとしても、どうしてそんなことになっちゃったのか。君は、そういうことにあまり興味がなかったじゃない。私の女性関係に

もいつも眉を擡めてた。だからね……ひよつとして、君も、私を誰かの代わりに——」

「ごちゃごちゃうるせえな。……さつきと挿れろよ」

「ああ……そうだね。やつぱり、そうか……」

中也、と、まるで何かの言葉の代わりのように名前を呼ばれた。

ばらばらに動かされていた指がまとめて出て行って、それから熱く猛った凶器で串刺しにされた。呼吸が逆さまになって、仰け反った背を片手で引き戻され、ずぶりと深く深く埋め込まれた。

「っ！ …っ！ ま……だぎ……い、まつ、て！」

「今日はなんだか……優しくしたくないなあ。いい？」

「い……やだつていつたら、やめて、くれんのかよ……！」  
「ふふ。よく分かっているじゃないか」

いつもそんな風にイイコならいいのになあ。そんな言葉を呟いて、太宰は俺の腰を掴んで下からがつつと突き上げる。言つてやりたいことは山ほどあるのに、強烈な快感にわなわなと震える唇からはア行しか出てこない。内臓が飛び出そうだ。身体の中心を太宰に侵されて、めちゃくちゃにかき回されて、もう、いま、死んでもいい。

自分の下で興奮に乱れる男の吐息さえも、うんざりするほどいとおしい。

これほどに、おまえのことが好きだつて、どうして分らないんだよ。

そりゃ頑なに隠してきたのは俺だ。でもそれくらい、おまえなら暴けたはずだろ。俺がおまえを、誰かの代わりにしているだつて？ ふざけんじゃねえよ、おまえもこんな思いはしてない。俺はずっと、ずうっと、いい子だったはずだ。手前の色恋も、裏切りも、邪魔せず見ていてやったろうが。だからこのくらい、好きにしたつて許されるはずだ。

「だ……い……」

汗ばんだ頬に触れて、噛み付くようにキスをした。テクニクも何もなく貪つて、太宰治はこんな味がするのだと、脳髓に焼き付かせようとした。

俺よりも大きな手が苛立ったようにそれを振り払い、逆に俺の頬を掴んで応酬する。自分よりも大きな獣に喰われるとき、こんな心地なのだろうか。長く野蛮なキスにびくびくと身体が跳ねて、涙だか涎だか分からないも

のが顎から首筋へ垂れていく。腰を支えられていた両手を失って、俺は無様にも背中から床へ倒れてしまった。口付けをやめようとしないう太宰も一緒に倒れてソファからずり落ち、そのまま俺の身体に覆い被さる。

「私とキスするだけで、こんなになっちゃうくせに！」

「くせに？ くせにつてなんだよ。ああそうだよ、手前とキスするだけで俺はこの様だ。仕方ないだろうが。好きな男と口付けて、セックスをして、こんな気持ちいいことが他にあるか。おかしいのは手前の方だ。俺よりずっと柔らかくて、乳房があつて、いい匂いもするのだから女たちを抱いておきながら、なぜ俺とこんなことを続ける。いい子じゃないのは、太宰、いつもおまえの方なんだよ。」

ふと気付いたら、太宰の左頬に貼られていたガーゼが剥がれ落ちていた。てっきり俺への無自覚な嫌がらせで付けてきたコスプレだと思っていたが、そこには真っ赤な傷跡があつて、本当に怪我をしていたのだと驚いた。「……手前が遅れを取るなんて、誰にやられた？ 寝ばけたのか？」

それともいい歳してまだ自傷行為か、と尋ねたら、太

宰は自分の頬に手を当ててガーゼのないことを確認し、心底どうでもよきように「引つかかれたんだよ」とだけ答えた。

「引つかかれたあ？ そのへんの女にかか？」

「そうだよ。振られたって言ったでしょ」

「ああ、フェラの上手い風俗嬢か……ん？ 手前はそいつに振られたんだろ？ なんて別れ話を持ちかけてきた方がそんな攻撃的なんだよ。怒るのは普通、振られた側だろうが」

「あつ。あつ……まあ、いいじゃない、そんなことは」

「いやいやよくねえよ。手前の数少ない取り柄を傷つけられちまつて」

もういいじゃない、そんな話！ となんだか雑な話の逸らし方をして、なおも食い下がろうとした俺の身体をくるりと裏返した。

「そんなにしつこいなら、もう中也の好きな私の顔、見せてあげない」

「は、だ、だれが手前の顔なんか」

今のはあくまで客観的な、とあたふた言い訳をしようとしたら、背中から体重をかけられて、ドレスの上から

思い切り肩を噛まれた。

痛いと言う間も貰えず、後ろから尻を持ち上げられて挿入される。今まで何度かされてきたのとは違う角度でごりごりと内壁を押し潰されて、ひ、は、と絶命しかけの小鳥のような細かい息が喉から押し出された。

「やっ：だ、これ、やめ：：」

「あーあ、背中も切っておけば良かった。けどもう、そろそろ私も辛いから」

ちゃんと全部受け止めてね、と言った太宰の声がやけに切なくて、いったいどんな顔でそれを言っているのか見たかったのに、自分の声がうるさくて、とても身体を動かす余裕はなかった。生温かいものが腹の中にかかられて、床に額を擦り付けて身悶えしても、最後の一滴まで許されず、太宰は、昔、事ある毎に俺を悪戯で陥れたときにしていたのと同じ笑い方で、は、は、と笑った。そして、ようやく満足したのか俺を後ろから抱き締めて、太宰、重い、と声をかけても、しばらく何も言わずにそうしていた。



第四話 瞳はアレキサンドライト

帰りの車を走らせている間、立原は一言も喋らなかつた。それもそのはずだ。店の外で大人しく待っていたら、やつと出て来た上司と一緒に敵組織の男まで乗り込んできて、「武装探偵社の社員寮まで」とタクシーのように使われたのだから。聞きたいことは山ほどあつたろうに、余計なことを詮索するなど俺に注意されていたのをちゃんと守っていた。良い心がけである。

俺としても、いくら休戦中とはいえ本来は敵対関係にある組織の人間をマフィアの車に乗せるつもりはなかつたのだが、相も変わらず良すぎたセックスだとか、事後やたらと長い時間抱き締められていたこととか、色々あつて頭がふわふわしていたので、歩いて帰るの面倒だなあ、乗せてつてよ、と調子良く同乗して来た男を蹴飛ばすタイミングをうっかり逃してしまつたのだつた。

「ああ、暑い。シャツがべつたべただよ」

「部屋にシャワーと替えのシャツがあつただろ。使えば良かつたじゃねえか」

「いくら私でも、マフィアの店で全裸になるほど無鉄砲ではないよ。ああでも、そうだね、シャツは貰つておいても良かつたかな。購う手間が省けるし」

「貧乏くせえこと言つてんな」

俺は外の景色を眺めながら、窓硝子に映る太宰の横顔を見ていた。女に引つ搔かれたという頬の傷が忌々しい。額の方は酒瓶で殴られたのだそうだ。全く、元マフィアが素人の女に傷を付けさせるなんて。そんな女を選ぶ趣味の悪さにもいいかげん辟易する。

「おい太宰、手前はそろそろもう少し：手前の女を大事にしろよ」

「ええ？　なんで君にそんなこと言われなくちゃならないの。中也に関係ないじゃない」

「俺が実害を被つてるからだよ！　いくら何でも連敗すぎだろ。：：：ひよつとして手前、わざと自分が振られるように仕向けているんじゃないか？」

「はあ？　そんなことして私に何の得があるのさ。まああれだよ、平安時代の美人も時とともにへちやむくれの醜女と呼ばれてしまつたように、悲しいかな、美男にも流行り廃りというものがあるのかもしれないね。これは

来世に期待かな」

……胡散臭え。急に口数の多くなった太宰を訝しんだが、確かに、自分で聞いておいて何だが、元々複数の女を同時進行していて当たり前だったこいつが今になってわざわざその関係を清算しようとする理由が思い当たらなかった。

マフィアを抜けるときでさえ、誰にも一言もなく消えて、それで泣いた女が組織内にも山程いたのに、今さら誠意ある別れ方を覚えたわけでもないだろう。それとも、着る服を変えたようなささいな変化がそれなのか。

「……まさか、今度は武装探偵社を抜けるのか？」

「どうしてそうなるの。君って時々思いもよらない方向に飛躍するよね」

そこが中也の面白いところだけだ。そう言って、太宰は黒のネクタイを解き、ぼいっと俺の膝の上に放り捨てた。シャツのボタンも二つ外して、ふうと息を吐く。

社内には冷房が効いていたが、そこまで汗をかかせたのが俺だと思うと、防弾仕様の窓を開けて叫び出したくなってしまう。頬杖をついている指先を頬に食い込ませながら俺は必死にその衝動と戦っていた。

「これは内緒の話で、独り言のだけどね」

組織を抜けるのって、結構大変なのだよ。特に過去の経歴を洗うために外部との接触を断って潜伏していなくちゃならない期間がね。

不意に太宰はそんな話を始めた。おいおい大丈夫かよ、と思わず運転席の立原の方を見やったが、太宰は特に気にする風もなく続ける。

「私は叶うならば毎日ダラダラゴロゴロしていた人間だけど、あれはできればもう二度と御免被りたいな。本当に何もしちゃいけないんだもの。退屈で死ぬ、ついでう死に方も実際存在するのかもしれないと思った」

「そりゃ、手前の出奔に協力した奴等も慈悲深いことだな。俺だったら、見返りにそれこそ死ぬほどこき使うが」

「そうだね、存外優しかったよ。何も持つていくことは許されないと言われたけれど、一つだけ見逃してくれたし、中に何か細工がされていないか散々調べるついでに、おつかいにも行ってくれたし」

元のサイズより随分ちいちゃくなっちゃったけどね。そう言って、太宰はジャケットの内ポケットからいつも身に付けているループタイを取り出し、首に回した。

「この服には似合わないね。まあいいか」

「なあ、太宰……」

「ん？ なに？」

なに？ じゃねえよこの野郎。それはこっちの台詞だわ。何だよ、なんなんだ、手前は。

これで口説かれていないというなら、俺の方がおかしいのか？ これでも勘違いするなというなら、俺があまりにも色恋に慣れていないのか？

「おまえは……どうして、それを」

だって、それではまるで、俺がこの首輪を外さずにいた四年間と、手前が過ごしていた時間は、同じ——

「……あの、着きました、けど」

つい口走りそうになった何かを、運転席からかけられた声で我に返り飲み込んだ。外を見ると、しみつたれた階段しかないアパートが、切れかけた街灯に照らされてひっそりとそこにあつた。門には表札がない。住所だけは報告で知っていたが、ここが探偵社の社員寮か。

「ああ、ありがとう。いやはや流石はポートマフィア、君のような末端の構成員まで私の住所を知っていて、何も案内せずとも辿り着けるとは。森さんの統率力も馬鹿

にできないね」

「……聞いてねえのか、俺らは一度アンタらの事務所を襲撃してる。下調べくらいしてた」

沈黙を守っていた立原がむつとした口調で反論した。そういえば人虎の件で立原は一度探偵社とやり合っていたのだったか。戦果は散々なものだったらしいが。

「成程、君は『黒蜥蜴』の立原道造君か。……立原ねえ」

「……オイ、送らせておいて絡むんじゃねえよ。うちの構成員に妙な詮索をするなら殺すぞ」

「きゃあ怖い！ そうだった、おっかない五大幹部サマも乗っていたのだったね！ 小さいからつい存在を忘れて喋ってしまったよ！」

「てめ……ああもういいわ、着いたんならさっさと降りろ。あと死ぬ。車が汚れっから部屋で死ぬ」

はあい、と腹立つ笑顔で車を降りようとした太宰を、急かしておいて一度呼び止めた。

「……待て。おい太宰、手前、あと何人女がいるんだ。次はどういう女だ？」

今日一回でもうこの遊びは止めにしてほしい。その話をするのができなかった。次に呼び出されたときこ

そ、必ず伝えなければいけないと思った。俺はこの男のように酔狂な変態ではない。同類のように振舞ったって、その仮面を被り続けるのには限界があるのだ。事実、そんな仮面など、今にもひび割れて剥がれてしまいうようになってる。ここが限界で、潮時だった。

「え？ そうねえ、あと残っている子は……」

太宰は車のドアに手を掛けたまま少し思案して、それから「いないや」と口にした。

「は……？ いない？ いないって、じゃあ、今日の女で打ち止めってことかよ？」

「そう……いうことになるかな。うーん、まさかの独り身。気がつかなかったなあ」

いやいや手前は女遊びが酷いだけで元から独り身だろ。そんなツツコミは打ち止めという事実には比べたら心底どうでもよかつたので口には出さなかつた。

もう太宰を振る女がない。それはつまり、その女の穴埋めに俺が呼び出されることもなくなるということだ。

「そうか。そうかそうか！ 良かったじゃねえか、これで暫く振られることもねえだろ！ なんせ付き合ってる奴がいねえんだからな！ これに懲りたら、次からは女

への態度をちつたあ改めろや」

なんという朗報だ。改まってもうあの約束は無効だの何だのと言いくるめられる予感しかないやり取りをする必要も、そのための心の準備も必要ない。向こうから勝手に終わりにしてくれた。どんなクソみたいな現実にも終わりは来るのだ。安堵のあまり感動すら覚えた。

「……随分と嬉しそうだね、中也」

そんな風には見えなかつたけど、と不機嫌面になつた太宰が部下の前で余計なことを言い出しそうになつたので、じゃあな、さつさと死ねよ！ と会話を打ち切り、太宰の側のドアをこちらから閉めて車を発進させた。

「……なんか、大変つすね」

会話からどこまで事情を察したのか、立原は深い同情のこもつた声でそう呟いた。

「ああ、だがそれも今終わった」

俺はそう返し、一番高いワインを保管しているセーフハウスへと自分を送らせた。

◇ ◇ ◇

「太宰、昼間から不機嫌を撒き散らすのはやめろ。敦が困っているだろう」

探偵社のソファーに寝そべって仕事をサボっていたら、事務用品を注文する分厚いカタログの角で国木田に頭をはたかれた。スミノフの瓶で頭を割られたときの傷はもう完治しているとはいえ、まだ私の頭にはぐるぐると包帯が巻かれたままだったというのに、情け容赦ない一撃である。

「……私、不機嫌そうに見える？」

「見えるから言っとるんだ。貴様、今日は敦と聞き込みの予定だろう。そんな凶悪な面で話しかけても誰も証言してくれんぞ。いつものへらへら締まりのない顔はどうした。どこかに置いて来たなら取りに行つて来い」

「聞き込み……面倒だなあ……」

身体を起こし、床に落とされたカタログを意味もなくべらべらと捲りながら、どうにかして今日の予定をサボれないかと色々考えを巡らしたが、依頼資料を手にとって遠慮がちにこちらへ視線を送っている敦と目が合い、三つ浮かんだ逃亡案をやむなく破棄した。適当に終わらせてしまった方が早そうだ。

「まったく、最近少しはマシな働き振りになってきたと思っていたのに、気分屋が過ぎるぞ」

「そう言われても、なんかやる気が出ないのだよね」

「太宰のやつが気分屋なのは入社するときからだろ。ほら、遊んでないでさっさと行くよ国木田」

「俺は遊んでなど……おい、いいか太宰、ちゃんと聞き込みに行けよ。明日報告書を貰うからな」

「はいはい、行つてらっしゃい」

くどくどと続く説教を適当に聞き流していたら、与謝野先生が国木田を呼び、連れ立って出て行った。あの二人はたしか今、娼婦街の連続殺人事件を調査しているのだったか。どう考えても国木田より私の方が色々と適任だと思ふのだが、ポートマフィアの息のかかった店も多からという理由で私は調査員から外されていた。

入社当時こそ接触しないように気をつけてはいたが、先日まで週一でポートマフィアの幹部と密会していたのだからそのような気遣いは無用なだけけれど、わざわざ話すようなことでもない。

それに、その密会もここ数週間はご無沙汰だ。

「あの……大丈夫ですか太宰さん、その頭の包帯のどこ」

「ん？ ああ平気だよ。もうこれは治っているからね。そんなことより敦君、何か足りないものない？ 注文するよ、ほら付箋とかボールペンとか、拡声器とかカラーコーンとか。すごいね明日届けてくれるんだって」

「時間稼ぎしようとしても駄目ですよ。明るいうちに出来ないと聞き込みできなくなっちゃいます」

「敦君もすっかり可愛げがなくなっちゃったなあ」

先程の一撃でほつれた頭の包帯を解いてゴミ箱に捨て、手渡された資料に仕方なく目を通す。

なんて面白味のない事件だ。やっぱり私も娼婦街の方に回してもらえば良かった、と思って、そういえばあのときの中也のコスプレは傑作だったなといつぞやの夜に思いを馳せる。

ナース服を着てくれたときも大笑いしたが、チャイナドレスは癩が見立てが良かったのだろう、上等な赤い生地が化粧にもよく映えて、正直似合っていた。あの服を切り裂いて自分の膝に座らせたときの征服感はまだなかった。元々あるべきピースが正しい場所に収まったような、満たされた感覚があった。

思えば、中也とバーで会った日に首輪の約束を行使し

て、中也がそれをおかしな風に解釈して、流れて抱いてしまったあの夜から、毎週今度はどんな面白い姿を見せてくれるのかと、わくわくしながら過ごしていた。自然に女性の方から振ってくれるのを待たなくて、向こうから別れたいと言いつすように仕向けていた。そんなことをしていたらあつという間に手持ちの弾がなくなってしまうわけだが、どうにも新しい出会いを求めて出かける気にはなれずにいる。

最後に会った日から一週間後、一度中也に連絡をした。今から飲みに行かないかと。彼の返答はこうだった。

「なんで俺が手前と酒を飲まなくちゃなんねえんだ。適当に女引っかけて酔い潰れて死んどけ、じゃあな」

この私が飲み誘っているというのに、首輪の件がなければ出て来てもこないのだ、あの帽子置き場は。

例えば、言う通りにしたとして、手頃な女性を口説いて付き合ひ、その後で振ってもらうように仕向けられ、また「私を慰めるための中也」が現れるだろう。だけれど、その付き合ってから振られて、という工程を踏むのが面倒くさくてまるで気が乗らない。かといって、ナンパして断られましたというだけでは「振られた」にカウ

ントできないような気がするし、どんな女性か説明するのも難しい。適当な説明をして、それは付き合ってもないじゃねえかと言われたら、なんだか提示した条件を自ら崩すようで、私の負けのような気がするのだった。

「太宰さんがぐずるのも分かりますけど。確かに、少しややこしい案件ですよね」

「ん？ ああ、うん……」

四つも下の後輩から『ぐずってる』と言われてしまうのはどうなんだろうと思いつつ、聞き流した。

自分でも、面倒なことをしているという自覚はある。中也を使って遊びたいのなら、なにも律儀に実在する女から振られたという事実を用意せずとも、嘘でも何でもついて、その日の気分に合わせて演じてほしい女のキャラクタアを創作してしまえばいいのだ。私はそういったことが殊更得意だし、やろうと思えば女性のキャラクタアなど無限に作り出せると思う。

けど、それでは駄目なんだ。彼の前では私は、一度も間違えたことのない相棒でありたかった。作戦立案を間違えたことのない、自ら持ちかけた取引において興奮めするような嘘はつかない、嫌がらせには手を抜かない、

そんな、たとえ何年離れていたとしても、会えばすぐに私だと思い知るような存在でいなければ、中也の相棒はつとまらないのだから。

「……………んん？」

声に出していたらしい。どうかしましたか、と私の手の中の資料を覗き込んで敦が尋ねる。

誰が死んだとか何が盗まれたとか、被害者だとか加害者だとか関係者だとか、そんなよもやまな紙の束が、ばさばさと手のひらからこぼれ落ちる。

わっ、わっ、ちよ、と慌ててそれを拾い集めようと敦が身を屈めたら、窓の外には快晴の青が広がっていた。

「なんだ、私にも……」

こうありたいと思うような色が。

「太宰さん？」

「行こうか、敦君。そんな紙屑は捨て置き給えよ」

「ええ？ でも聞き込み対象者のリストがこれに」

「必要ないよ。犯人は明白じゃないか。回りくどいことはやめて、直接本命を叩くでしょう」

今日中にちゃっちゃんと解決して明日は休みにしよう、と言ったら、太宰さん有給残ってましたっけ？ と敦が

聞く。そんなもの気にして休んだことなど一度もない。むしろあつたのか、有給なんて。初めて知った。

「明日太宰さんがいなかったら、また国木田さんが怒りますよ。報告書を出せて言つてたじゃないですか」

「そうだっけ？ 仕方ないなあ、それも今日終わらせてから帰るよ。他の依頼の期限はまだまだ余裕があるし、それなら文句ないでしょ」

「太宰さんがその日のうちに報告書を書くだなんて：大丈夫ですか？ まだお昼なのに急に調子が良くなつて、また変なキノコとか食べてませんよね？」

サボると怒られるし、仕事をしたらしたのでこの扱いである。腑に落ちないが、まあいい。

「長年患つていた色盲が、どうやら治りそうなんだ」

コートを羽織つて歩き出した私の後をついて来ながら、日頃の仮病が災いか、太宰さんいくつ病氣持つてるんですかと敦が聞いてくる。もう一つ自分のことが分かつた。どうやら私は、教育係には向いていないようだ。

◇ ◇

驚くほど順調な日々だ。自分の承認待ちになつていた書類の山が綺麗に片付いた執務机の上に足を乗せて、俺はゆっくりと煙草をふかしていた。

不本意なスケジュールが割り込んでくることもないし、火焰太夫への返礼も送つたし、退屈な書類仕事も終わった。きわめつけに明日はオフだ。整備から戻つて来たばかりの愛車で少し遠出でもしようか。行き先は決めずに海辺を走らせて、夕日を見るのも善い。温泉宿があつたら立ち寄つて、そこで一杯やつて：そんなことを考えていると、今の自分はひよつとしたら世界で一番穏やかな人間なのではないかと思えてくる。

机の引き出しを開けると、きちんと丸めて仕舞われた黒のネクタイがあり、手に取ると、ほどけて一本の線になつた。鼻先を埋ずめると、わるいやつの匂いにする。

「よその組織の車に忘れ物なんてしてんじゃねえよ」

ごみはごみ箱へ。俺はそれをくしゃくしゃに丸めて、屑籠へ投げ入れた。

散々に心かき乱された数ヶ月間だったが、終わつてしまえば、あれはあれで良かったと無理やり思い込めなくもない。元はといえば俺の方から仕掛けたことであつた



し、身体も心もおかしくなりそうだったが、ぐずぐずと長いあいだ恋慕していた相手から抱いてもらえたのだ。それも何度も。吹っ切って進むには、十分すぎる思い出ではないか。

あいつがなんで俺の贈ったアレキサンドライトをずっと身に着けているのか、それは結局分からずじまいだし、この先また何かの仕事で会う機会があったとしても、俺の方から尋ねることはしないだろう。

いいんだ、それで。

あいつが何を考えているか分からないことなんて、今までにも数え切れないほどあったし、他の奴らに比べたらかなり意図を汲んでやっていた方だと思うが、そんなことにチンケな優越感を感じていたからこの様だ。俺も結局は、数多の女たちと同じように、自分だけは太宰にとつての特別なのだと思っていたかったのだ。

多頭飼いの、飼い殺しだとも知らないで。

手入れを欠かしていないお気に入りの短刀が、執務室の照明を受けてきらりと光る。

もう約束は果たした。そろそろ俺も、ここにはいない飼い主を追いかけることは終わりにしよう。

肌に馴染みすぎた黒革のチョーカーを指で摘み、それと首の間の僅かな隙間に刃を差し込む。

「さよならだ、クソ野郎」

なぜだか力が入らない。勢いに任せようと目を閉じ、そう独白したのと同時だった。不意に外から執務室の扉が叩かれた。

「……何だ、入れ」

「失礼する。中原君、聊かまずい事態になった」

姿勢を正して入って来たのは、『黒蜥蜴』のリーダーであり首領直属の部下でもある広津柳浪だった。首領は昨日からエリス嬢を連れて休暇に入っているの、まず俺のところへ報告に来たのだろう。

「広津、おまえらだけじゃ收拾できないような事態か？  
今、交戦中の組織はなかったはずだが」

それとも組織内の異能力者に裏切り者でも出たか、と聞いたら、広津は何やら言いにくそうに咳払いをしながら、裏切り者というか、裏切った者というか……と言葉を濁した。嫌な予感しかない。

「つまりだね……太宰君が、来た」

「追い返せ」

「そういうわけにもいかんのだ」

「抵抗しやがるなら銃撃しろ。首領には黙っておく」

あいつは本物の馬鹿なのか？ 裏切り者が白昼堂々マフィアの本拠地を訪問するなど、ちよつとマシンガンで脅してやるくらい首領も見逃してくれるだろう。迎撃部隊に行かせろ、俺はあんな馬鹿には構ってられねえ、と投げやりに命じたら、広津は重々しい溜息を吐いて、観念したように口を開いた。

「すでに今、迎撃部隊と睨めっこの状態だよ。彼らが君からのお叱りを怖がって引き金を引けんだ」

「はあ？ なんて俺が叱るんだ。一発でも当てたらポーンをやってでもいいくらいだぜ」

「……太宰君は正面エントランスの前に車を横付けして、その屋根に立って先ほどから君を呼んでいる。彼が乗ってきた車は、君の愛車だ」

「今すぐ行く。迎撃部隊は全員下げさせろ」

俺は机を飛び越えて廊下へと出た。

非常階段の手すりの隙間から全速力で一階まで降下し、ロビーを駆け抜けてエントランスを出ると、長い石階段の下の車道に見慣れた自分の愛車が停まっていた。その

屋根に土足で立っていた太宰がこちらに気付いて、手に持っていた拡声器で「あっ！ やつと来たね！ おーい中也〜！」と朗らかに俺の名を呼ぶ。

ああしばらく整備に行っていた俺の愛車。こんな形で再会したくはなかった。

「てんめええ……何しに来やがった……とりあえず、そこから降りろ！ クソ鯖！」

「えー？ なにー？ よく聞かえないな、あのね、私、君に聞いてほしいことがあって来たのだよー」

「おーおーそうか、いいからまず降りろ！ ゆっくり！ 傷を付けずにだ！ その後で聞いてやるから！」

とりあえず太宰の野郎をあそこから引きずり降りしてそれから五発殴ろう、と決めて一歩踏み出す。すると、それを待っていたように、太宰は拡声器のボリュームをさらに上げて声を発した。

「あのさ中也ー！ 私たち、セフレはやめて正式にお付き合ひしよう!!」

きいーん、と音量を上げすぎた拡声器がハウリングを起こした。あるいは、俺の頭が限界を迎えた音であったかもしれない。ようやく追いついて俺の隣にやって来た

広津がすつと顔を背け、迎撃部隊を下げておいて良かったですな、と言った。いや、ビルの中にいる連中にも全員に聞こえただろう今のは。「あれ元幹部の太宰さんだよね?」「セフレ? えっ? セフレ:??」とひそひそ話をする声がそこから聞こえてくる。

俺の全身はわなわなと震え、爪の先まで真っ赤な異能発光に覆われていく。

「だあああああいいいい!!」

びしびしと地面に亀裂が走る。俺はそこを蹴って地上高く飛び上がり、一気に太宰目がけて拳を振り下ろした。もう車が傷つくことは気にしていられない。また修理に出せばいいことだ。そんなことより今はこの男をぶん殴らなくては気が済まなかった。

みるみる間近に迫ってきた太宰の顔は、柔らかく微笑んでいた。拡声器をその場に捨て、猛スピードで落ちてくる俺に向かって両手を広げる。その両手から青い異能発光が起こり、俺の重力を飲み込むように無効化する。バランスを崩した俺の身体を抱きとめて、そのまま一緒に車の屋根に倒れこんだ。べこん、と嫌な音がした。

「普通に殴ればいいのに、私に異能を使うなんて、馬鹿

だなあ、中也是」

よしよし、と頭を撫でてきた手を振り払い、車の屋根から引きずり降ろす。道を行き交う人々の視線が針のように刺さる。恐ろしくて見られないが、ビルの方からは俺の部下たちも大勢見ていることだろう。居た堪れず、太宰を車の助手席に押し込んで、自分も運転席に乗り込み、急発進でその場を離れた。

「手前:ほんと、ほんつと、頼むから死んでくれ:」

信号待ちの間にハンドルの上に額を付けてぐったりとそう呟くが、太宰は「どこ行く? 私、明日休みなのだよね。海の方まで行こうよ。蟹が食べたいなあ、私」と全く意に介さず浮かれた発言を返す。

奇遇だな。俺も明日は休みだし、海に行こうと思っていたよ。だが、それは手前とじゃねえ断じて。

「手前は:まじで、何がしたいんだよ:」

「それはさつき言ったよ」

「蟹が食いたいつてか」

「違うよ。中也と付き合いたい。私と付き合って」

「:::昼間から酔っ払ってんのか? お断りだ」

「えっ!? 嘘でしょ、断るの!？」

「なんで断らねえと思うんだよ！　どんだけ自信過剰なんだ手前は！　女にモテなくなつたからって手近なところで済まそうとしてんじゃねえよ碌でなしが。性欲処理なら他を当たれ」

「そんなつもりで言ったんじゃないんだけど…そっか、そっかあ、中也も私を振るのだね…」

話しながら運転していたら、高速に入ってしまった。何も考えずに真っ直ぐ走っていられる分には良いが、こいつをどこで降ろそう。次のサーピスエリアにでも置いて行くか、と考えていた。

太宰はどうせ本気で言つたわけでもなくせに、わざとらしく助手席のシートの上で膝を抱えて「残念だな」などとぼやいている。すごく鬱陶しい。

「まさか中也にまで振られるなんて。私もいよいよヤキが回つたようだ。この悲しみをどうしてくれようか」

「知らねえよ。誰かに慰めてもらえ」

「そうだね…そうすることにするよ」

太宰は携帯電話を取り出してぼちぼちと弄り出す。新しい女に連絡を取っているのか、それとも出会い系か何かに手を出しているのだろうか。なかなかサーピスエリ

アの看板が現れてくれない。

ジャケットに入れていた自分のスマートフォンも鳴り出したので、車線を変えて減速しつつ画面を見ると、広津からの着信だった。あの騒動の場に置いて出て来てしまったので、心配して連絡を寄越したのだろうか。

「はい、中原」

「やあ中原君、太宰君とよろしくやっているようで何より。君たちがまだ幼い時分から見てきた私としては複雑だが嬉しくも思う。祝福するよ」

「は…？　おい、ちよつと待て、なんで手前が広津の端末を持つてやがる」

電話口から聴こえてきたのは、隣に座って広津の声真似をしている太宰の声だった。さっき広津さんに挨拶したときに掏ちやつた、と自分のものではない携帯電話をひらひら見せびらかしながら言う。

「あのさ中也、このまま聞いてほしいんだけど」

「運転中だ」

「いいからいいから。実は私、たつた今振られてしまつてね。相手は中原中也という人なんだけど」

「なっ…」

「約束だもの。慰めてくれるよね？ 中也」

カーナビが入れた覚えのない目的地へのナビを始めた。朝からなんだか海に行きたくなっちゃってねえ、宿ももう取ってあるんだよ、と言って、太宰は助手席のシートを倒し、欠伸をしながら寝転がった。

最初から、ここまで計算ずくか。俺が人目を気にして車を出すことも、告白を断るといふことも。おそらく、俺が明日休みであるといふこともどういふ手段でか事前を知っていたのだろう。

俺は、またしてもこいつの手のひらの上か。

「なんでだよ：なんで、そこまでして：」

「ふふ：なんでだろうねえ」

宿に着いたら教えてあげるよ。そう言って、太宰はふざけた柄のアイマスクをして寝息を立て始めた。

◇ ◇

おい、着いたぞ。

おでこにひんやりとした感触が当たって、アイマスクを外したら、ペットボトルの水を持って中也が私の顔を

のぞき込んでいた。

ありがとう、と言ってついでと触れて離れるだけのキスをする、と、「別に手前の：」と言いかけた台詞はどこかへ行ってしまった。

運転席のドリンクホルダーにも同じボトルがあるのに、私の分で購入していた以外にないじゃない。優しいな、と口には出さずに思いながら、ほどよく冷えた水が胸に染み込んでいくのを感じていた。

以前もこうして、私に飲み物を購ってきてくれたっけ。今に始まったことじゃない。君は昔から優しかった。

私が余計なことを喋らなければ、こんな風に気遣ってくれる場面も幾度かあった。

「私が：いけなかったのだよね」

君の優しさを享受することを拒んでいたのは私だ。そんな大人しくしていれば誰にでもばら撒かれるような心などいらなかった。

私は、私のためだけに用意された中也が欲しかったのだ。ずっと前から。

「太宰：？ どうしたんだよ気持ち悪いな、また悪い夢でも見たのか？ それとも車に酔ったか？」

「いや、大丈夫だよ：でも着いたなら部屋でもう少し横になろうかな。中也もずっと運転してて疲れたでしょ、私のことは置いて行っていいからさ、中也も少し休んでから行きなよ」

返事は要求せずに、先に車を降りて宿の女将と話していると、乗ってきた車を駐車場の奥に停め直した中也が後から入って来た。私の腕に財布をばしんと当てて、おい財布忘れてんぞ、本当に大丈夫かよ、としかめ面で私を見上げる。

「そうですね少し顔色も悪いようですし：仲居に布団を敷かせておきます」

「すみません：。食事も部屋でお願いできますか」  
受付でチェックインを済ませ、部屋へ案内されている間、「男の方は荷物が少ないですけど、お客様は本当に身軽にいらしたんですね」と仲居に雑談を持ちかけられたのに対し私が何も返さずにいると、具合が悪そうなのを氣遣ってか、中也が「俺たち、急に来ることになったもんで：」と無難な会話を引き受けてくれていた。  
俺たち、急に来ることになったもんで？ 頭の中で彼の台詞を復唱して笑いを堪えていた。

部屋に通されると、畳には先程女将が指示していた通りすでに布団が二組敷かれていた。中也はそれを踏まなように隅を回って広縁の椅子に腰掛け、窓の向こうで静かに揺れる夕暮れの海を眺めながら、まあまあ善い部屋だな、と呟いた。

そして煙草に火を点けようとしたが、「それは良かったよ」と答えた私の声が自分のすぐ間近で聴こえたことにはっとし、ようやくこちらを振り向いた。その腕を引いて、ふかふかの布団の上に彼の身体を倒す。

「：：：おい、何すんだよ。少し寝るんじゃねえのか」  
「寝るよ。でも、一人じゃ寝たくないな」

「餓鬼か。大人は一人で寝るもんだ」  
「つれないな。：：：あまり驚かなかったじゃない。本当は、私について来たならこうなると分かっていたんでしょ」  
手前、さっきまで具合が悪そうだったのは演技かよ、と中也が嘆息する。

「そうだよ。私が自分の心拍をいじって血流を止められるってこと、中也は知ってたくせに、忘れちゃった？」  
「忘れてた。手前が人間じゃねえってことを」  
「人間だよ。だからこんな小細工を使うのさ」

まだ火の点いていないシガレットが、畳に落ちてころと転がった。初めて呼吸を覚えたようなキスだった。黒の革手袋の中に指を割り込ませ、嫌がる手を押さえつけながらそれを脱がせる。

シャツも脱がせようとして、彼の首に巻き付いているチョーカーに小さな切り込みが入っているのを見つけ、不機嫌と上機嫌が同時に湧き起こった。皮膚には傷が付いていない。自分で切ろうとしたのか。あのナイフなら一瞬だろうに、できなかったのか、と。

その亀裂をそつと指でなぞり、浮き出た鎖骨の形に唇を合わせると、いやだ、帰る、とまだ何も始めていないというのに弱り切った声が出て、どうしたのかと顔を上げたら、道に迷った子供のような眼差しで私を見つめる視線と目が合った。

「……思い出した。バーで会ったときも、そんな顔をしていたね。もう何度もこうして触れたのに、今さら何をそんなに戸惑っているの」

「……してない」

「してるよ。すごく困った顔してる」

「準備を、してねえから。今日は……」

この距離でないと聞き取れないくらい小さな声でそう言って、見るな、と中也は両手で自分の顔を隠した。

「準備？ 今日準備なんて必要ないでしょう？ 君は中也本人なのだから」

ああそれとも、準備ってアッチのことだった？ と服の上から股間をまさぐって太股の間に手を持っていくと、すらりとした脚が逃げて、私の肩をげしげしと蹴り返した。むりだ、ほんとにむり、などと言っている。

「もう、仕方ないなあ」

一度彼の上からどいてやると、あからさまにほつとした息を吐いた。私が座卓の上を物色していると、その隙に逃げそうな気配がしたので、「駄目だよ」と咎める。

「そこに居て。さっきの質問の答えを聞きたいだろう？」

「……素直に答える気があるのかよ」

「勿論。私はこういう場面で嘘はつかないよ。知ってると思うけど」

そう言うと、中也は壁に背中を付けて膝を折り曲げ、ならさつきと言えよ、と舌打ちした。

中也にとつて、あの質問の答えがそれほど重要だといふことが分かり、私は情けなくも少し安堵していた。

どうしてここまでして、君に執着するのか。その答えを求める君もまた、私に執着しているのだ。仮説でしかなかったことが真実になれば、この数ヶ月間の君の奇行も、それを喜ぶ私の反応にも、簡単に説明がつく。

「私と君が欲しがっているものは、おそらく同じものだから、これをあげる。必要でしょう？」

首尾良く置いてあつてよかつた。旅館だし日本茶しか無いかと思つたが、ドリップバッグのコーヒーと一緒に、一つずつ包装された角砂糖も用意されてあつた。

私がそれを彼の口元に差し出すと、中也是驚き、なんぞ知っているんだとうろたえる。

「お見通しだよ、君の考えそんなことなんて」  
いつも一口目には、砂糖の味がしたからね。

君は一人で何でもできてしまふくせに、急に迷信を持ち出したり、会話に諺を織り混ぜてきたり、変な願掛けをしたり、そんな古めかしいことをするんだ。弱い人間に混じつて暮らしていたときの名残なのかな。昔からそんなところが気持ち悪いと思つた。

「さあ食べて。私の中也になる時間だよ」  
指先で包みを剥がして唇にそつと押し込んでやると、

琥珀色の角砂糖は彼の舌の上でほろほろと崩れながら溶けていった。もはや彼の中でこれは儀礼化していたのだろう。舐めているうちに肩がゆるやかに下がり、身体から力が抜けていくのが目に見えて分かつた。

下を脱がせて隠された場所を確かめたら、かたくなに縮こまっていた。彼と関係してから持ち歩くようにしていた、けれどいつも使われることのなかつた使い捨てのローションの封を切り、手のひらでそのねつとりとした感触を楽しむ。

「この街を守るだとか、粹に暴れてやるだとか、君はいつも私以外の誰かの影響を受ける。そういうところが、本当に嫌いだったんだ」

もうこれ以上、変わってしまったくないですよ。  
「ただでさえ、理性を手放せば一瞬で遠くへ飛んで行つてしまえる君が、私を殴りに来なくなつてしまつたら、私は簡単に死んであげてしまえる。君の望み通りになるのはすぐく癪だ」

たつぷりとローションを塗り込めた彼のそこに、指先が飲み込まれていく。中也是手の甲を噛んで、ふうふうと苦しげに息を吐いていた。



「だから君も、いつまでも私を嫌いでいてくれなくちゃ、困るんだよ。首輪を外したくらいでなかったことにできるつもりなら、目に見えない形でも君を縛り付けておかないきゃならない」

中也は何も答えない。耳を真っ赤に熱れさせて、視線を合わせずに耐えている。

初めてしたときですら、惜しみなく声を聴かせてくれたのに、『中原中也』は我慢するんだ。そう思ったら、ぞわぞわと背骨の上を一匹の蛇が這った。中也はいま中也になろうとしている。私を嫌いな中也のまま、その身に私の劣情を受け入れようとしている。その事實は、何よりも私を興奮させた。

「いつもこんな風に、自分でほぐしてから来てくれていたんですよ。どんなことを考えながらしていたの？ この後で私に抱かれると知っていて、女性たちが私をどんな風に求めていたのか、そんなイメージを頭の中で反芻していたのかな」

「……俺に、聞くのかよ」

手前の『答え』とやらは、もう終わりか？ と臉の上まで赤くしながら、中也は私を睨み付けていた。

「うん。足りなかった？」

「ああ、足りねえどころか、今のは零点だ」

彼はずるずると布団に沈み込んだまま、私のズボンのベルトを引き抜いた。ジッパーを下げられたら、自分でも呆れるほどに腫れ上がっていて、はは、と小生意気に笑われる。自慰すら億劫で放つたらかしていたものだから、待ち望んでいた肉体を前にして、全身の血液がそこに集まっているようだった。中也はそれを指で自分の秘所へ導き、ぬるぬると擦り付けながら、まどろっこしいんだよ手前は、と溜息まじりに吐き捨てた。

「ふうん、随分な辛口採点じゃない。そこまで言うなら、君が模範解答を示してごらんよ」

「……ああ、いいぜ。一度しか言わねえ、よく聞け」  
「どうぞ」

「手前からどんな風に求められたいか？ 手前からずつと嫌われたままでいたい？ そんなこと、俺は考えたことも無えよ。俺は、手前のことが『ただ、好き』だ」

ただそれだけで、こんな馬鹿みてえなことになってんだ、分かったかよ鈍感野郎、と、中也は真っ直ぐに私を見上げたままで言い放った。

私は、はく、と口を開けた。が、二の句が告げずに黙り込んでしまう。おいどうした、なんか言えよ、とやかくそ気味に中也が追撃してくるのだが、ええ：あゝ：とマイクのテストのような声しか出てこない。

「ええと：：待って、えと：：もう、入れていい？」

「そうじゃねえだろ！ 実は馬鹿なんじゃねえのか!?」  
「鈍感も馬鹿も言われたことないよ！ 君がいきなり変なこと言い出すから！」

今まで、甘い言葉を囁いて、とか、時間をかけてゆっくり責め立てて、とか、君は素敵だと褒めたたえて、とか、何も言わず獣のように食って、とか、十人十色のご要望に応えてきた。けれど、ただ好きだと、そんな風に言われたら、私はどうしたらいいのだろう。

ああそうか。君が無理だ本当に無理だと困っていたのはこういうことなんだ。

化けの皮を剥がされたら、抱き合うことがこんなにも恥ずかしい。

「おい：：手前、顔が赤いぞ。やめろ、こつちまで伝染る」  
「君は元々真っ赤だよ：：もう、くそ、もういい」

私はもう考えるのをやめる、と言って腰を進めた。

あつ、てめえ、このやろ、という苦情と背中への平手打ちが飛んできたが、ばんばんに膨らんだ亀頭を濡れそぼった蕾の中に押し込んだら、息を詰まらせ、感電したように肌を震わせた。それは私の方も同じで、火傷しそうなほどに熱くうごめく粘膜に余すところなく吸い付かれ、過ぎた快感に緩んだ口の端から涎が落ちそうになつたのを、手で拭って奥歯を噛み締めた。

「中也あ：：さっきの、もつかい言って：：」

「：：一度だけって、言つたらが」

「そこをなんとか」

なんだよその雑な頼み方、らしくねえな、と息を乱しながら中也が笑う。その拍子に、目尻からとろりと涙が流れた。綺麗だな、青い瞳が揺れて、まるで夜の海みただと思つた。

「じゃあ質問を変えろ」

「あつ、んつ、なんだよ、動きながら、しゃべんな」

「なんでいっつも泣いちやうの？」

「それは前にも：：あつ、あ、あ！」

中也の身体は、奥へ奥へと私を誘い、腰を引けば健気に追いかけてくる。

このまま、中也の身体の中に飲み込まれてしまうのも良いなあ、彼が生み出すブラックホールのように、丸ごと食べてもらうなんて死に方も、気持ちイイかもしれない、そんなことを思いながら、欲しがる場所をごちゅごちゅと突いてやる。中也は唇を嚙んで己の悲鳴を閉じ込めながら、ぼろぼろと泣いて、シーツを濡らした。

「うあ、も…や、くるし…」

「苦しいからなんて、ねえ、嘘でしょ？ 中也」

君は気持ち良くて泣いちゃうんだ。初めてしたときも、その次も、そのまた次のときも今も、好きな男に抱かれて、身体の中をえぐられて、それがたまらなくって泣いているんですよ？

ねえ、と呼びかけて指を絡めたら、彼の指先はありもしない鍵盤を叩いて痙攣し、ひっ…と漏れ出た悲鳴と同時に肉壺がぎゅううと締まった。搾り取る動きに精子がせり上がり、本能的に笑ってしまう。彼の襟足からじわじわと滲み出した汗の匂いを嗅ぎながら、絶頂に暴れる身体を何度も突き上げた。優しく揺れていた瞳はどこかへ飛んでしまっていて、可愛いな、欲しいなあ、という感情が積み木のように重なっていく。

「中也…私、君の嘘をもう一つ知っていてね」  
「自らも前をべたべたに濡らし、後ろには精液を注ぎ込まれながら、彼はぼんやりと視線だけをこちらに向けた。  
「君、ナカに出されるの大好きでしょう」  
「は…」

あまりの発言に、そんなわけ、と反論しようとして唇が開いた。それを逃さずに両手を封じたままで挿挿を再開する。射精の後に柔らかくなった私の陰茎は、抑える術を失った中也の嬌声によつて彼の中で再び大きくなった。注いだばかりの白濁したザーメンが後孔から押し出され、ひどい音をたてながら溢れ出してくる。

「あっ！ ああ、つやめ！ 止め…っ！」

「初めてしたときにね、思ったんだよ…口ではすぐく嫌がってたけど、私がイッたとき、めちゃくちゃ気持ち良さそうにしていたなって。本当はあのとときにこうしてあげたかったのだけど、君はすぐに帰っちゃったから」

その後も、仕事があるとかなんとか言っていて、終わったらすぐに帰っちゃって。

「ただ今日日は、その言い訳が通じないことは知っているし、朝までたっぷり時間がある。」

「中也のナカに何度も精液出して、ぐちゃぐちゃにかき混ぜてあげるね」

青褪めたその表情すら、可愛らしいと思ってしまう。どうやら自分は末期だな、と思ったが、不思議と悪い気はしなかった。

「や…だ、ださい、ほんとに、やめ…」

「んー？ やめないよ」

だって、君にそんなに怯えられたら、正直、興奮して死にそうなんだもの。誰にも見せない醜態を晒すのが怖いのだろうか、それこそ私が見たかったものだ。

ちゃんと私が死ぬまで看取ってよ、と言ってゆるゆると腰を打ち付けてやると、あ、あ、と猫のように鳴きながら、もうさっさと死ねよ！ と途方も無く耳に馴染む罵声が返ってきた。

自分の着ていたシャツも脱ぎ捨て、中也が達してはその余韻から呼び戻し、舌と舌が溶けてしまいそうなキスを繰り返しながら、もはや人の身体の一部ではないようなぐちよぐちよに濡れたそこを絶え間なく突いた。

もうだめだ、狂う、と抵抗していた言葉も、許しを請うような甘えた音色に変わり、背中にすがり付く腕の感

触を心地よく感じながら、その声、態度、表情の全てを、自分の中に閉じ込めていた。

私にいじめられているのに、私に助けを求めたりして。「ばかだなあ…」

もつと早く、君をこうしてしまえばよかった。

ただ私を好きだと言った青い瞳が、沈む夕陽を溶かしてオレンジ色に潤み、やがて暗い夜に瞬く月の光を吸い込んで、きらきらと反射する。

ふつとその双眸が閉じられて、気を失ってしまった彼の中でゆつくりと絶頂感に浸りながら、誰にも聞かれなように呟いた。

「君のことが好きだ、中也」

翌朝、あれほど酷く抱き潰したつもりだったのに、中  
也は私より先に起きて、広縁の椅子で朝の凧いだ海を眺  
めながら、昨日取り上げられた煙草をふかしていた。

「ちよつと自信なくすなあ〜」

「あ？ 何がだよ」

「なんでもないよ」

「はあ、手前、昨晚はさんざんヤリやがって：」

結局何も食えてねえし、と掠れた声でぼやき、がつく  
りと頭をうなだれた。中也のことだから、温泉宿で美味  
しいごはんを食べながら酒を飲むというのを楽しみにし  
ていたのだろう。無論、そのプランに私の存在は入って  
いなかったのだろうが。

「そういえば夕食は部屋食でとお願いしていたのだけど、  
無かったね。部屋の前まで来てくれてはいたけど、まあ  
気を遣ってくれたのだと思うよ」

「…：は？ 来たって：いつのことだ」

「んー、中也が『もう死ぬ、ゆるして』って言い始めた  
あたりかな？」

「言ってねえ!!」

「言ったよ。いやだなあ中也、素人の仲居さんの気配

にも気がつかないなんて、ポートマフィア五大幹部の名  
が泣くね。マフィア辞めたら？」

「素人の女に酒瓶で頭殴られた元最年少幹部にだけは言  
われたくねえよ！」

あれは痛かった。まあ最後に殴らせないと別れないと  
ごねられたので、わざと急所を外して殴らせたのだが、  
これからはもうちよつと痛い怪我也も覚悟しなくてはなら  
ない。なんせ相手がマフィアきつての体術使いなのだ。

中也の呼吸も間合いも本気の度合いも把握してはいるけ  
ど、それと防げるかどうかは別問題である。

あまり怒らせないようにしたいところだけど、中也は  
私といるときは大体怒っているから難しい。

「あ、そうだ。昨日も言ったけど、私たち昨日から付き  
合っているという事で良いんだよね？」

「ふざけんなよ手前、結局肝心なことは言わねえで：。  
お断りだ手前みてえな卑怯もんのヤリチン野郎」

随分な言われようだ。さすがの私もここまで酷い言葉  
で振られたのは初めてだった。

「あらら、また振られてしまった。じゃあ朝も早いけど、  
早速慰めて：」

「やらねえよ！ これ吸ったら帰るからな！」

丁度良いタイミングで部屋の外から遠慮がちに襖を叩く音が聞こえた。ここは温泉も有名だが、食事が非常に評判の良い宿だ。姐さんの影響でそういった知識に明るくなった今の中也なら、当然知っているだろう。

「朝食が来たみたいだね。楽しみだなあ、あっ、中也は知らないんだよね？ 仕方ない、一人分下げてもら……」  
ぼとりと悪戯に燃やされていただけの灰が落ち、中也は深い深い溜息を吐いた。

「……いるに決まってるんだろ！ 腹ペコだわ！」

「あはは！ 私も！」

乱暴に煙草をもみ消してどすどすと襖を開けに行ってくれた中也の首には、部屋着の浴衣には不釣り合いな黒のチョーカーが巻かれたままだ。

あれは傷が付いたから、また新しいものを購ってやろうかな。今度は指輪にしてもいい。さぞかし嫌がつてくれるだろう。

朝陽に反射してきらきら輝く宝石を眺めながら、私はそんな嫌がらせを考えていた。



## エビローグ・プロローグ

丘の上にある蜜柑畑の方角から、柑橘の爽やかな香りが風に乗って流れてくる。

昨晩の大雨の影響で海はまだ穏やかではなく、俺は混泥土の防波堤に腰掛けて、遠くから砂浜に迫る高波を眺めていた。

月曜は姐さんの予定に同行して、会合終わりに解散となったところで他の部隊の作戦の助太刀。火曜は首領から頼まれた買い物を済ませて本部に戻ったところで誰ぞの指揮する作戦会議に引っ張られ、水曜は姐さんの客人を一日警護して、木曜にその報告が終わったところで準幹部クラスからの命令でいきなりこの海辺の町まで連れて来られた。ポートマフィアのシマで武器の密輸に手を出したある宗教法人のアジトを襲撃するので、その作戦の先陣を担当しろということだった。

吹きすさぶ嵐の中で、俺以外の構成員はろくに動いていなかったが、これといったトラブルも面白いこともな

くリーダー格の人間を捕らえ、作戦指揮担当にそいつを突き出したら、うちがやったという証拠を残していないか敷地内を一回りして来いと言われた。とりあえず外周だけ適当にゆっくり歩いて戻って見たら、乗ってきた車も、他の構成員の車もいなくなっていた。働くだけ働かせて、置いて行かれたらしかった。

こういうとき、人は煙草を吸いたくなるのだろうか。『羊』のメンバーの中にも好んで吸っていた奴が数人いたが、わざわざ盗みに入ってから、明日の生活に必要でもないものを欲しいとは当時の自分は思わなかった。

マフィアには愛煙家が多く、広津や、姐さんも時々執務室で長い煙管をふかしている。太宰の野郎と任務が一緒になったときに、ラム酒のような香りのする煙をくゆらせているのを見たことがあり、それは旨いのかと尋ねたが、「別に。身長が伸びなくなるから君は吸わない方がいいんじゃない」などと言われ、そこから喧嘩に発展したので一本貰ってみることもしなかった。

そういうえば、太宰が指揮する作戦に入るときは、ちゃんと事前に一言あるんだよな。姐さんか首領のどちらから聞かされて、どうせそうすれば俺が断ることができ



ないと思つて話を通してゐるのだから、そんなことをぼやいたとき、姐さんは「あの小僧はああ見えてそういう筋は弁えておるのだ。マフィアというものの性質を、よく理解しておる」と珍しくあいつを褒めた。

出世は早そうじゃの、と競争心を軽く煽られもして、俺は肩書きなどには興味がなかつたが、この組織においては上に行けば行くほど首領や世話になつてゐる姐さんの役に立つ機会に恵まれることは明白で、だからまんまと悔しくなつたりした。俺は俺なりに、こうしてあちこちの作戦で活躍して見せれば組織内で顔売れるのではないかと考えて動き回つてゐるわけだが、結局この異能だけを求められ、とりあえずこいつに行かせておけばいいかとばかりに策もなく前線に配置されるのは、『羊』にいたころと何が違うのだろうと虚しくなる。これではただの便利屋ではないか。

ぼつりと頬に小さな水滴が落ちた。また降つてきたらしい。今日は一日晴れになるはずだから、おそらく通り雨だろう。どのみち傘など持つてゐない。視界一面の海に小雨が降り注ぐ様は、まるでカーテンのようだ。俺はその情景を一人静かに眺め続けていた。

「あつ！ こんなところにいた！ ちゅーやー！」

静寂は突如破られた。いつものスーツ姿に黒のコートを引つ掛けた包帯まみれの男が、自分の名前を叫びながら防波堤まで駆け寄つてきた。車も見えなければ、誰も同伴させてゐない。また入水でもして、一人で川の上流から流れてここまで漂着したんだろうか。

「うるつせえな……なんで手前がここにいんだよ」

「それはこつちの台詞なのだけど？ 一昨日の護衛任務の報告を森さんにした後、昨日の午後から今日一日は休暇というのが本来の君の予定だったはずだよねえ？ 月曜の夜も、火曜の午後もつかまらないし！ 何なの？ 中也くんはまだ小さいから予定通りに行動することもできないんでちゅか？」

いきなり来ておいて、太宰は初っ端からカリカリ怒つていた。つかまらないという発言から察するに、こいつも俺に何か手伝わせるつもりでいて、当てが外れたということだろうか。姐さんからそんな話は聞いていなかったが、だとしたら少し残念だった。どうせ働くのなら、こいつの指揮で動く方が面白いことがあるからだ。

「俺がどこで何してゐようが手前には関係無えだろうが。

第一、これはれっきとした仕事だ」

「仕事ねえ：知ってるよ、あの頭の悪いカルト集団の頭を捕らえて来いって話でしょ。昨夜、森さんの部屋にその件で報告に来ていたよ。雨の中の大立ち回りだったって、濡れた靴を見せびらかしながらね」

「知ってるんじゃないか。だったら何の用だよ」

「その報告の中に君の名前は無かったよ。商品としてアジトの地下に保管していた銃火器の数を考えれば、それなりの損害はあつたはずなのに、こちらの死傷者もゼロ。優秀だねと褒められてすっかり気を良くして帰って行ったけど、鎮庄までの状況を聞けば丸分かったよ、君を使ったってことは」

成程。太宰のその発言で合点がいった。だから俺を置いて行ったのか。自分たちだけでこの任務を片付けたことにしかかったわけだ。子供も大人もズルをするときに考えることは同じだな、と思うと同時に、準幹部クラスの間でもそんな姑息なことをするのかと、げんなりした気分になった。

「言ったよねえ？ 君の弱点はその異能が強すぎることで。ただでさえ、その歳でしかも敵対組織にいたと

いう経緯があるのに、いきなり尾崎幹部の直揮部隊に入れたんだ。やつかむ連中は山程いる。だけどもとに喧嘩を仕掛けて勝てる相手じゃない。だったらいいように使ってやろう、あわよくばその途中で死なせてやろうって思われてるんだよ。そのくらい君でも考えたら分かるでしょ？ それとも過労死したいとか？」

過労死か。自殺嗜癖の手前でも絶対に選ばなそうな死に方だな、と言って笑ったら、話を逸らすなよ、と不機嫌な声で返し、ひよいひよいと身軽に石段を飛び跳ねて防波堤に上り、俺の隣に腰を下ろした。

「歳のことを言うんなら、手前だって同じだろ。そっちに至っては、いきなり自分の隊を持たされてんじゃないかね。そろそろ毒の一つや二つ盛られてるだろ」

「そんな勇氣と野心にあふれた無謀な人間が現れてくれるのを僕も待ち侘びているんだけどね、みんなビビって何もしてこないのだよ」

これのせいでね、と言って太宰は袖を通さず肩に引っかけているだけの外套の襟をひらひらと指で遊ばせた。

「ああ…：確か首領から贈られたっていう」

「そう。マフィアのしきたりとして、新人は勧誘した者

から身につける品をひとつ与えられる。それは、勧誘した者が責任を持って面倒を見るといふ徴であり……言い換えれば、この者に危害を成せば自分が黙っていないぞという牽制でもあるんだ」

首領から贈られた外套を着ている僕に命張ってまで嫌がらせしようなんて奴はいないよ。まったく、森さんも姐さんの部隊に中也を入れるなら、姐さんの勧誘だつてことにしておけば良かったのに、どうして蘭童さんの帽子なんて贈つたんだろう……いくら準幹部だつたとはいえ、相手が故人じゃ、そりゃみんな遠慮せずちよっかい出してくるよ。姐さんも姐さんだ、中也の現状は把握しているだろうに、あの人は過保護なんだか放任主義なんだか分からないところがあるから……。

太宰の話は止まらない。普段からペラペラうるせえ奴ではあるが、今日は特に口数が多い。俺の不在で自分の予定が狂つたことがそんなに嫌だつたのだろうか。こいつの方こそ予定もへつたくれもなく頻繁に姿を消してその辺をほつつき歩いている印象なのだが、他人が原因でそうなるのは不本意ということなのかもしれない。

「はあ、分あつた、分あつたよ。今から手前の方も手伝

いに行つてやつから、車呼べよ。それでいいだろ？」

一昨日本部に顔を出したときに、廊下で立ち話をしていた奴等から、どうやら太宰の指揮する部隊がある作戦で敗走を続けているらしいと聞いた。あいつでもヘマすることはあるんだな、いい気味だぜとそのときは思ったのだが、おそらくその件で俺を使いたいのだろう。

しかし、俺の言葉に対して太宰が見せたのはものすごく呆れた顔だつた。

「は？ 何言つてんの？ 僕が君に手伝ってもらいたいことなんて無いのだけど」

「なんか作戦がうまくいってねえんだろ？ それで俺のどこに来たんじゃねえのかよ」

「ああ……勘違いしているようだけど、直近の僕の任務のことを言っているなら、敗走を続けていたのはわざとだよ。リーダー格の人物を絶対に生け捕りにして情報を取るようにつて森さんからの命令でね、ところがそいつが臆病者で全然表に出て来ないものだから、自軍の勝利を確信させて思わず前線でイキがりたくなっちゃうような状況を作つてあげたわけ。まんまと出て来たところを捕縛して昨日の午前中に終わらせたよ」

なのに報告に来た君とは入れ違いになっちゃうし、雨は降ってるし、靴は濡れるし、もう最悪、と付け足す。「ていうか何？ 仮に僕が本当に苦戦していたとして、その状況が君一人で覆るとでも思っちゃってるわけ？ 自信過剰なんじゃないの？」

いちいち腹の立つ野郎だ。だが、助太刀する任務も別にないとなると、いよいよこいつがこんな場所まで来た理由に検討がつかない。

「……何しに来たんだよ、そろそろ言え」

ここで下手に反論するとキリがなくなる。喋り続ける太宰の顔をじっと見て答えを求めると、急に言葉を詰まらせて一度視線を外した。

「……………おい」

「……………おい」

「……………おい、なんだよ、どうした」

「……………これを」

「あ？」

「これを！ 購って！ 来たのだよ！ 感謝したまえ！」

どし、と雨水で湿ったシャツに、青い包装紙でラッピングされた直方体の箱が押し付けられた。

何だこれ、と尋ねても太宰は答えない。

まさか爆発とかしねえだろうな、と思ったが、隣にこいつが座っているのだから少なくとも爆発はないだろうと踏み、包装紙を剥がして恐る恐る箱を開けた。

中に入っていたのは、黒い革のチョーカーだった。

「おい……なんだよこりゃ」

「何って、見れば分かるでしょ。首輪」

「テメエは……俺は犬じゃねえし、さっきの話なら、手前の庇護なんていらねえんだけど」

「庇護？ 気持ち悪い言葉使わないでよ。これは約束の証だよ、中也が忘れないように」

「手前と約束なんてしてたか？」

「ほら、もう忘れてるじゃないか！ 僕の命令を一度だけ何でも犬のように遂行する約束だよ、電子遊技場での賭けで負けただろ」

「ああ………忘れてたわ」

そんなことだろうと思っただけでわざわざ忘れないようにこいつが物を用意してあげたのだよ、僕って本当に親切だよ！ ほんとに中也ときたら犬のくせに記憶力は鶏並みなのだから、こうやって僕がフォローしてあげない

とうんたらかんたら……とまた太宰は喋り出す。

「そういえば、そんなことも言ってたな。てっきり日頃の嫌がらせの延長で、すぐにも行使されると思っていたが、太宰がそれを持ち出してくることはなく、日々の任務においても太宰は自分に割り振られた仕事はたいいてい自分の部隊だけで完結させていたから、すっかり存在を忘れていた。」

「わざわざ首領や姐さんに話を通してまで俺を作戦に巻き込むときは、俺がいないと成立しないというよりは、俺を暴れさせた方がより面白くなる局面であったようにも思う。そういうときは太宰も楽しそうであったし、俺もまた、こいつの作戦で暴れるのはすかつとした。」

「こいつにとっては、それこそストレスの溜まった飼犬をたまに散歩に出してやっているつもりでいたのかもしれない。」

「……そういうことなら、仕方ねえな」

「本当にこいつは頭がいくせに変なことばかり思いつきやがる。こんな奴の作戦で踊ってやれるのは俺くらいしかいないのではないかと思うほど。」

「えっ、え、……つけてくれるの?」

「なんだよ、そのつもりで購ってきたんだろうが」

「チョーカーを首に巻き、小さな金具を留めると、太宰はさんざん感謝しろだのなんだの言っていたくせに俺が大人しく受け取るとは思っていなかったのか、おろおろとうろたえて、俺の首にそれが収まるのを凝視していた。」

「おい太宰、ひとつ教えろ」

「な、なに?」

「俺が組織に入っつてすぐ、手前は俺が姐さんの部隊に配属されたことを怒ってやがっただろ。ありやなんだ」

「君は僕の犬だから。って、言わなかつたっけ?」

「実際のところ、手前が俺を犬呼ばわりして嫌がらせしてくんのは、部隊が違つても変わんねえじゃねえか」

「今週の負け惜しみ中也」とかいふふざけたタイトルの太宰自作の小冊子をばら撒かれ、それを回収するために何度本部内を走り回ったか分からない。

「手前は俺に異能を使わせて楽しめてのし上がりてえのかと思つてたが、どうもそうじゃねえみてえだし。むしろ単独で潜入してやばくなったところで俺に迎えに来させることもあるだろ。手前はいつたい、俺の何を必要としているんだ。なぜ、俺に拘る」

俺の話聞いていた太宰の表情にもう狼狽はなかった。むしろ少し怒っているようにも見えた。

「さっきも言ったけどさあ、君はちよつと自信過剰なんだよね。僕は中也が欲しいだけ。中也の異能なんかなくたって任務には全く支障ないし、いたら敵にすぐ突っかかっていつちやうから邪魔なくらいだよ。たまに呼んであげてるのは、犬が退屈しないように遊ばせてあげているつもりなんだけど？ 本当に飼いたい主の心犬知らずだよね、だから犬は嫌いなんだ、丁度良いドッグランを用意するのだから楽しんでないのだよ？」

「……そうかよ」

こいつ、いま自分が何を言ったか分かってんのか？

止まらない長台詞の合間に、とんでもないことを言われた気がする。

そうか。あらゆる異能を無効化するこいつにとつて、俺の異能など、頼るに値しないものなのだ。こいつが頼るのは自らの頭脳のみ。俺に構うのは、俺の力が必要だからではないのだ。ただ、俺のことが欲しいと。

「……中也、なんか顔赤くない？ 雨に濡れたから？ 馬鹿でも風邪ってひくのかな」

「かもしんねえ。そろそろ横浜に戻るか」

言われてみれば、首が少し熱い気もする。革の滑らかな感触が指に残り、このチョーカーを外すのはいつ、どんなときになるのだろうかと思像する。

俺の力を必要としないこいつが一度きりしか使えない約束を使ってまで俺に何かをさせようとするのは、いったいどんな状況なのか。強敵に阻まれ、とうとう年貢の納め時となった大ピンチだろうか？ そこに颯爽と現れて、敵をあっさりボコリ、傷ついた太宰を慰める俺。さぞかしプライドも傷つくだろうから、それはそれは全霊をもって慰めてやるとしよう。

やばいな、ちよつと楽しみになってきた。

「えー？ 寒いし遠いし、その辺で適当に休んでいかない？ 前に姐さんが森さんと話していたのを聞いたけど、この辺りに良い温泉宿があるらしいよ。蟹料理が美味しかったって言ってたから気になつていたのだよね」

「は？ やだわ。温泉は正直入りてえが、なんで手前と泊まつていかなきゃならねえんだ。一人で行けよ」

「駄目だよ、僕みたいな美青年が一人で温泉宿なんか泊まつたら、傷心旅行で自分に浸つてる痛いヤツだと思わ

れちやうじやない」

「安心しろよ、手前はその包帯だらけの見た目だけでも十分痛いヤツだから」

「中也のケチ！ 僕、森さんに中也を連れて戻ると言ったのだよ。君が一人で戻ったら、太宰君はどうしたって聞かれるからね！」

「あー、あー、もう分かった、面倒臭え：今日はさすがに家に帰って寝てえんだよ。また今度な」

「今度っていつ？ 絶対だからね中也、約束だよ」

「おう。そんなときは手前が予約しとけよ」

ところで手前はどうかやってここまで来たんだよ、川から流れて来たのか？ と聞いてみると、そんなわけないじゃない馬鹿なの？ 電車だよ、と太宰は答えた。こいつが普通に電車に乗って来たと思うと面白すぎてつい吹き出してしまう。

「なに笑ってんの気持ち悪…：あ、雨がやんだね」

「そうだな。おっ、ほら見ろよ太宰、海に虹だ」

青空に残された雲の切れ間から、海面に七色の虹がかっていた。横浜の海にかかる人工の虹の橋とは違う自然のものだ。大きな曲線を描き、青い空からさらに青い

海の中へと落ちて溶けてゆく。

「綺麗だな」

こんなにでかい虹は初めて見たぜ。俺が防波堤の上立って素直にそんな感想を述べると、太宰は自分も立ち上がって不思議そうに空を見上げ、それからしばらく海を見つめて、最後に隣に立つ俺と目を合わせた。

「うん、綺麗だ」

君が僕の犬である証を受け入れたことを祝福しているようだね、と両手を広げて言ったので、いつも一言余計なんだよ、と言ってその足を軽く踏んでやった。

このときから、俺の首にはいつも黒い革のチョーカーが巻かれている。

感想箱です→  
読んだよ〜という方、一言いただけると嬉しいです  
<https://kansoubako.net/#/EcosanB>



アレキサンドライト

2019/11/17 初版発行  
2019/12/01 第2刷発行

繪子（うしろがみ）

Twitter：@EcosanB

Pixiv ID：2660047

印刷：丸正インキ様

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）を禁じます。処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にした上で可燃ゴミとして廃棄してください。